國性爺合戰

近松門左衛門作

序詞 花飛び蝶駭けども人愁へず。水殿雲廊別に春を置く。曉日靚粧す千騎の女。紅唇翠黛色を交へ。土も蘭麝の梅が香や。桃も櫻も長へに。花を見せたる南京のオロシヘ時代ぞ盛り。盛んなる。地 抑大明十七代思宗烈皇帝と申し奉るは。光宗皇帝第二の皇子代々の讓りの絲筋も。 絕えず亂れぬ青柳と。本フシ靡き從ふ四方の國。寶を積んで貢物。歌舞遊宴に長じ給ひ。玉樓金殿の中には三夫人。九嬪二十七人の世嬪八十一人の女御あり。 凡そ三千の容色顏を悅ばしめ。群臣諸侯媚を求め珍物奇翫の捧物。二月中旬に フシ瓜を。獻ずる桑華なり。地 爰に三千第一の御寵愛華清夫人。去年の秋より懷妊あつて此の月御產の當る月。 君の叡感臣下の悅び。聖壽四十に及び給へども世繼の太子在さず。 豫て天地の御祈禱此の度に驗あり。王子誕生疑ひなしと產屋に明珠美玉を列ね產着に越羅蜀錦を裁ちスエテ御產今やと用意ある。中にも大司馬將軍吳三桂が妻柳歌君。此の頃初子を平產し殊に男子の乳なればとて。御乳付の役人其の外乳女侍女阿監。役人の官女付添ひて。掌の上の フシ珊瑚の珠とぞ侍きける。時に崇禎十七年中呂上旬。韃靼國の主順治大王より使を以て。詞虎の皮。豹の皮南海の火浣布部支國の馬肝石。其の外遙國島々の寶庭上に並べさせ。使者梅勒王謹んで。韃靼國と大明國古へより戚を勵み。國を爭ひ軍兵を動かし鋒先を交へ。互に仇を結ぶこと。且は隣國の好みに違ひ且は民の煩ひたり。我が韃靼は大國にて七珍萬寶くらからずと申せども。女の形餘國に劣つて候。地 此の大明の帝には華清夫人とて隱れなき美人在する由。我が大王戀焦れ深く所望に候へば此方へ贈り給つて大王の后と仰ぎ。詞大明韃靼向後親子の因をなし。長く和睦致さんと式の如くの貢物。地 數ならねども頷諾大將梅勒王。后御迎ひの爲 フシ參朝とこそ奏しけれ。地 帝を始め卿相雲客。今に始めぬ韃靼の離題すは誹亂の基ぞと。宸襟安からざる處に。第一の臣下右軍將李陷天進みいで。詞今迄は國の恥辱を愼み隱し置き候。去んぬる辛の巳の年北京五穀實らず。萬民饑渴に及びし刻。某密に韃靼を賴み。米粟數百萬石の合力を受け國民を救ひ候ひき。其の返報に何事にても。韃靼の望み一度は必ず叶へんと堅く契約仕る。君今四海を保ち民を治め給ふも。一度韃靼の情によつてなり。地 恩を知らねば鬼畜に同じ御名殘りはさることなれども。とく〳〵后を送られ フシ然るべしとぞ奏聞す。地 大司馬將軍吳三

桂徘徊殿にてとつくと聞き。御階欄干蹈敲らし李蹈天が膝元にどうと坐し。調不便や御邊は何時の間に畜生の奴とはなつたるぞ。忝くも大明國は三皇五帝禮樂を興し。孔孟教を垂れ給ひ五常五倫の道今に盛なり。天竺には佛因果を說いて斷惡修善の道あり。日本には正直中常の神明の道あり。韃靼國には道もなく法もなく。飽く迄に啖ひ暖に着て。猛き者は上に立ち弱き者は下につき。善人惡人智者愚者の別ちもなく。畜類同然の北狄俗呼んで畜生國といふ。いかに御邊が賴むとて數百萬石の米穀を合力して。此の國を救ひしとはいぶかし〳〵。地民疲れ飢に及ぶは何故ぞ。上によしなき奢りを勸め宴樂に費を費し。民百姓を貧苦せり。己れが榮華を事とする其の費をやめたれば。五年や十年民を養ふに事を缺かぬ大國の德。詞叡慮も計らず公卿諂議にも及ばず。懷姙の后をかろ〳〵しく。夷狄の手へ渡さんといふ心底聊心得ず。地契約は御邊との相對。上に知らしめさぬこと畜生國の賈物。內裏の汚れ取つて捨てよ官人どもと。北狄を事ともせず國の威光を見せたるは。管仲が九度ッシ諸侯の會も斯くやらん。地韃靼の使梅勒王大きに怒つて。詞ヤアヤア大國小國はともあれ。合力を得て民を養ひし恩も知らず契約を變ずるは。此の大明こそ道もなき法も無き手に足らぬ畜生國。地軍兵を以て押寄せ帝も后も一くるめ。我が大王の履持にする事日を數へて待つべしと。席を蹴立て立歸る李蹈天引止め。詞暫く〳〵慎り尤至極せり。某先年貴國の合力を受けて。一粒も身の爲にせず。國を助けしは忠臣の道なるに。今又約を變じ兵亂を招き。君を苦しめ民を惱まし剩へ。恩を知らぬ畜生國といはせんは御代の恥國の恥。地此の度臣が身を捨て君を安んじ國の恥を淨むる忠臣の仕業。これ見給へと小劍逆手に拔持弓手の眼にぐつとつき立て。眼蓋をかけてくるり〳〵とくり出し。朱になつたる睛ひつ攫んでなう御使者。調兩眼は一身の日月左の眼は陽に屬して日輪なり。片目なければ不具者。一眼を抉つて韃靼王に奉る。地國の恩を報ずる道を重んじ義を守る。大明の帝の忠臣の振舞是候と。勿にするて差出せば。梅勒王押戴き。調アヅ天晴忠節や候。只今吳三桂の言分にては。否とも兩國權を爭ひ合戰に及ぶ所。天下の爲に身を捨てて事を治め給ふ事。神妙〻妙。地忠臣とも賢臣とも申すにも餘りあり。后を迎へ取つたるも同然。我が大王の叡慮使に立つたる某も。面目是に過ぐべからず。フシはや御暇とぞ奏しける。地叡慮殊に麗しく。李蹈天が眼を抉りしは伍子胥が餘風。吳三桂が遠き慮は范蠡が趣あり。兩臣政を正す我が國は千代萬代も變るまじ。韃靼の使ははや本國に歸すべしと宴樂殿に入り給ふ實に佞臣と忠臣の表は似たる紛れ者。目利を知らぬ南京の君が。榮華ぞ三夏〳〵例なき フシ爰に帝の。地御妹。桐

檀皇女と申せしは。スエチまだ御年も十六夜の。月の都の宮人の胤や此の世に降る露の。フシ玉をのべたる御形。管絃の道書の道文字も働く口吟み。日本で歌と云ふけなが男女を和らぐとや。爰にも戀の中立は變らぬ物と詩を吟じ。年よりひねし御心兄帝奢りの樣。色に耽り酒宴に誇り。朝政し給はぬ御寵見の種にもと。行儀正しき御身持お伽の女官召寄せて。浮世咄も囃きの。フシ耳は戀する。目は睨む。心が伽羅の炷きざしのフシ思ひ埋みてあかさるゝ。地長生殿の方より出御なりと呼ばはつて。二十歳限りの后達二百人。梅と櫻の造り枝百人づつ片別けて振りかたけ。左右に召具し入り給ひ。詞なう妹君。我萬乘の位に卽き。臣下多き其の中に右軍將李踏天は終に朕が命に背かず。明暮心を慰むる第一の忠臣。御身に心を懸くると聞く。幸ひ朕が妹聟にせんと思へども。御身更に承引なく今日迄は打過ぎたり。地然るに此の度韃靼國より無體の難儀を云ひかけ。既に合戰に及び國の亂れとなるべき所。吳三桂などが忠臣顏口先の道理は誰も云ふ事。李踏天が左の眼を抉つて宥めし故。使も伏して歸つたり。詞國の爲君の爲身を捨てて不具となる。末代無雙の忠臣賞せずんばあるべからず。地是非に朕が妹聟北京の都を護らんと約せしが。御身承引あるまじと此の花軍を催せり。詞賢女だてしてすん〳〵とすけなき御身が心を表し。梅花を味方に參らする。朕が味方は櫻花女官どもに戰はせ。櫻が散つて梅が勝たば御身が心に任すべし。地櫻が勝つて梅花が散らば御身の負に極つて。李踏天が妻となす。天道次第緣次第。勝つも負くるも風流陣懸れや懸れと宣旨あり。下知に從ふ梅櫻フシ左右に分つて備へける。地勅諚なれば姫宮もよし力なしさりながら。心にそまぬ夫定め左右なう引くべきやうもなし。詞花も我身も魁けて。當今の妹桁檀皇女緣の分けめの晴れ軍。地大將軍は我なりと名乘りもあへぬかざしの梅。誰が袖ふれし梢には群れ居る鶯の翼にかけ散らす。羽音もかくやと梅が香も。芬々と打亂れフシ受けつ流しつ戰うたり。下詞姫君下知しての給はく。柳渦く木影には風ありと知るべし弱き枝には苔をもたせ。强きに花を開かせよ。うつらふ枝をば諾にかへて互に力を合すべしと。花に慣れたる下知によつてナホス喚いて蒐れば花を踏んで。同じく惜しむ色もあり。只一文字に頭に挿せば二月の雪と散るもあり。落花狼藉入亂軍は花をぞ三重へ散らしける。地かねて帝の仰によつて。心を合せし女官達悔方わざと打負けて。枝も花も折亂されフシむら〳〵ばつと引きければ。地勝色見せて櫻花サア姫宮と李踏天。御緣組は極つたりと數多の女官同音に。勝関揚ぐる頻伽の聲宮中響き渡りしは。千羽鶯百千鳥オクリ囃り〳〵かはす如くなり。地司馬將軍吳三桂鎧甲さはやかに出立ちて。偃月の戟會釋もなく振廻し。梅も櫻も散々

に雍散らし御前に畏り。詞只今玉座の邊に合戰ありと丁閑の聲殿中に響き。宮中以ての外の騒ぎによつて。物の具固め馳せ參じ候へば扨馬鹿らしや。御妹栫檀女と李踏天か緣定めの花軍とは。天地開けて以來斯るたわけた例を聞かず。君知ろしめされずや一家仁あれば一國仁を興し。一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。地上の好む所に從ふは民の習ひ。此の事を聞及び山樵土民の嫁取聟取。此處にても花軍彼處にても花軍。喧嘩闘諍の端となり花は散つても打物業。誠の軍起らん事鏡にかけて見る如し。地只今にも逆臣起り宮中に攻入り。喚き叫ぶ鬨の聲は聞ゆるとも。すは例の花軍と馳せ參る勢もなく。玉體をやみ〳〵と逆臣の刄にかけん事。勿體なしともあさましとも。フシ悔むにかひのあるべきか。地其の逆臣佞臣とは李踏天が事。詞君は忘れ給ひしか御若年の時。鄭芝龍と申す者佞臣を擯け給へと。諫め申すを逆鱗あり鄭芝龍は追放たれ。今老一官と名をかへ日本肥前の國。平戸とかやに住居致すと承る。地鄭芝龍が傳へ聞き。日本迄大明國の御恥辱ならずや。詞先年大明饑饉の時。李踏天が邪智を以て諸國の御藏の米を盜み。君に憐みなき故におのれ韃靼の合力を受け。地民を救ふと云ひなし國中に散らし與へ。萬民をなづけ謀叛の臍を堅めしと。知ろしめされぬ愚かさよ。地彼が左の眼を抉りしは是ぞ韃靼一味の相圖。御覽候へ南殿の額。大明とは大きに明かなりといふ字訓にて。月日を並べ書きたる文字。地此の大明は南陽國にして日の國なり。韃靼は北陰國にして月の國。陽に屬して日に讐へし左の眼を抉つたるは。地此の大明の日の國を韃靼の手に入れん一味の印。使も敏く其の理を悟り悅んで立歸る。積惡奸曲の佞臣早く五刑の罪に沈めずんば。地聖人出世の此の國忽ち擧古の域に落ち。尾を振り皮を被らぬばかり畜類の奴となり。天地の怒り宗廟の神祟りをなし。其の罪帝の一身に歸せんこと拳を以て。大地を打つには外るゝとも。吳三桂がこの詞は遠ふまじ。恨めしの寢慮やと泣いつ。怒りつ理を盡しフシ詞を盡して奏しける。地帝大きに逆鱗あり物識顏なる文字の講釋。理を付けて云ふならば白雪却つて黑しとも云ふ義あり。詞皆李踏天をそねみの詞。事もなきに甲冑を帶し朕に近寄る汝こそ。地逆臣よと立ちかゝつて御足にかけ。吳三桂が眞甲を踏付け給へば不思議やな。コハリ御殿頻りに鳴動して勅筆の額ゆるぎいで。大の字の金刀點。明の字の日偏。地微塵に碎け散つたるはフシ天の告かと恐ろしゝ。吳三桂猶身を惜まずエゝ情なや。詞御眼も暗みしか御耳も聾たるか。大の字の形は一人と書いたる筆畫。一人とは天子帝の御事。其の一人の一點とれば帝の御身は半身。明の字に偏なければ日の光なき國は常闇。忝くもあの額は御先祖大祖高皇帝。御子孫繁昌御代萬歲と宸翰を染め給ふ。地宗廟の神

の御怒り恐ろしと思召し。道を正し非を改め。御代を保ちましまさば。君に拋つ吳三桂が一命。踏殺され蹴殺されても厭はじここそ。土ともなれ灰ともなれ忠臣の道は違へじと。御衣に縋り大聲あげ〻エテ涙を。流し諫めしは代々の。鑑と聞えける。地かゝる所に四方八面人馬の音。貝鉦鳴らし太鼓を打ち。鯨波の聲地を動かし フシ天も傾く許りなり。地思ひ設けし吳三桂高樓に駈上り。見渡せば山も里も韃靼勢族を靡かし月鐵砲。内裏を取巻き攻寄せしは潮の満來る如くなり。地寄手の大將梅勒王庭上に乘入り大音揚げ。詞抑我が國の主順治大王。此の國の后華清夫人に戀慕とは謀。懐姙の后を召取り大明の帝の胤を絶さん爲李踏天が眼を抉つて一味の證を見せたる故。地時を移さず押寄せたりとても敵はぬ吳三桂。帝も后も搦め取つて味方に下り。韃靼王の憂所に踊ひ炊水でも啜つて フシ命をつげとぞ呼ばはりける。詞ヤア事をかし。百八十年草木も搖がぬ明朝を。攻破らんなんどとは大海に横たはる。鯨と蟻の狙ふに異ならず。地あれ追拂へ追拂へと駈廻つて下知すれども。我が手勢百騎許りの徒士武者ならで。公家にも武家にも誰あつて。下り合ふ味方のあらざればゝエテ拳を握つて立つたる所に。地女房柳歌君水子を肌に抱き乍ら。后の御手を引立てなう口惜しや御運の末。公卿大臣を始め雜人下郎に至る迄。李踏天に一味して御味方は我々許り。無念至極と齒噛みをなす。地アヽ悔むな〳〵いうて益なし。但し后の體内に帝の胤を宿し給へば大事の御身。一方を切拔けて君請共に。某御供申すべし其の子も爰に捨置き。お事は一先づ御妹を介抱し。海登の港をさして落ちよ〳〵といひければ。 心得たりとかひがひしく栴檀皇女の御手を引き。金川門の細道を フシ二人忍びて落ち給ふ。地いで是からは大手の敵を一當あてゝ追散らし。安安落し奉らん御座を去らせ給ふなと。言ひ捨てゝ駈出で明朝第一の臣下。大司馬將軍吳三桂と名乘りかけ。百騎に足らぬ手勢にて。數百萬騎の蒙古の軍兵。割立て。追廻し無二無三に切入れば。 韃靼勢も餘さじと。鐵砲石火矢隙間なく。矢玉を飛ばせて三重へ戰ひける フシ其の際に。地李踏天弟李海方。玉體近く亂入り帝の御手を兩方より確と取る。后夢とも辨へず。天罰知らずの大惡人御恩も冥加も忘れしかと。縋り給へばヲヽ汝とても助けぬと。取つて突退け氷の利劍を御胸にさし當つる。君は怒れる龍顏にスエテ御涙をかけ乍ら。地實け刃の鋒は刃より出でて刃を腐らし。檜山の火は檜より出でて檜を燒く。仇も情も我が身より出づるとは。今こそ思ひ知られれ。地鄭芝龍吳三桂が諫を用ひず汝等が詔ひに誑され。國を失ひ身を失ひ末代に名を流す。口に甘き食物は腹中に入つて。害をなすと知らざりし我が愚かさよ。汝等も知る如く夫人が胎内に。十月に當る我が子あり誕生も

程あるまじ。月日の光を見せよかしせめての情とばかりにて ッシ御涙。にぞくれ給ふ。詞ア、ならぬ〳〵。大事の眼を抉出したは何の爲。忠節でも義理でもない。君に心をゆるさせ韃靼と一味せん爲。眼球一つが知行になる。君の首が國になると取つて引寄せ。地御首を水もたまらず打落しサア。李海方此の首は韃靼王へ送るべし。汝は后々搦め來れと言捨てゝ ッシ寄手の陣へぞ駈入りける。地司馬將軍吳三桂敵勢多打取り。難なく一方切り開き君を落し奉らんと。立歸れば南無三寶。御首もなき倉骸朱になつて伏し給ひ。李海方后を搦め引立つる。ヤア味い所へ出合うたな。我が君の弔ひ軍齋にこそ外れたれ。非時を喰はうと飛びかゝり李海方が眞甲。二つにさつと切割つて后の縛め切り解き。涙ながらに倉骸を押直せば。地代々に傳はる御國讓り御即位の印の印綬御肌にかけられたり。エ、有難し是さへあれば。御誕生の若宮御位心安しと。鎧の肌に押入れ一先づ后を御供せうか。先づ御體を隱さうかと。難儀は二つ身は一つ打碎かんと敵の勢。一度にどつと亂れ入るさしつたりと切拂ひ。込入ればなぐり立て打伏せ薙伏せまくり立て。走り歸つて今は是迄事急なり。地御死骸は兎も角も一大事は御世繼と。后の手を引き立出づれば此の頃生れし我が水子。乳房を慕ひわつと泣く。エ、邪魔らしいさり乍ら。己れも我が世繼ぞと引寄せて骸の柄に。確と結ひ付けこりや。父が討死するならば成人して若宮に。忠義の根繼となれ。我等が家の水まぶりと振擔けてぞ 三重〳〵落人を ッシ切止めんと。地敵の兵慕ひよれば踏留まり。切捨て打捨て引く潮の海登の港に着きにけり。地是より臺洲府へ渡らんと。見れども折節船一艘も。渚に沿うて立つたる所に。四方の山々森の蔭。打ちかくる鐵砲はオクリ横ぎる〳〵雨の如くなり。地吳三桂は札能き鎧飛びくる彈丸を受けとめ〳〵。后を覆ひ圍へども運の極めや胸板に。はつしと中る玉の緒も ッシ斷れて敢なくなり給ふ。地吳三桂もはつとばかり前後にくれて立つたりしが。御母后は是非もなし十善の御子胤を。胎内にてやみ〳〵と泡となさんもいひかひなしと。地劍拔持つて后の肌押しくつろげ。脇腹に押當て十文字に裂き破れば。血潮の中の初聲は玉のやうなる男子皇子。嬉しも嬉し悲しも悲し。やる方涙に母后の袖引きちぎり押包み。抱き上げしが待て暫し。地取卷きたる四方の敵死骸を見付け。若宮を隱し取つたりと行末迄探されては。宮を育てん樣もなしと篤と思案し。我が子引寄せ衣裳を剝ぎ。宮に打かけ裸らせ劍取直し。水子の胸先刺し通し〳〵。地后の腹に押入れ天晴おのれは果報者。よい時生れ合せて十善天子の御身代り。出來しをつた出來いた婆婆の親に心殘すな。親も心は殘らぬぞといへども殘る憂き名殘り。鎧の袖に若宮を。包む涙に咽せ返り。オクリ別れ〳〵行くこそ哀れ

なれフシかくとは知らず。地柳歌君桁檀女を誘ひ。淡口迄落ち延びしが前後に敵みちみちたり。サァ是迄ぞ遁るゝたけと。繁る蘆間をかきわけてフシ身を忍びてぞ隠れ居る。圖李踏天が侍大將安大人。手勢引具しどつと駈寄せ。今の鐵砲慥に后か吳三桂に中つたと覺えしと。あたりを見廻しこりや見よ。后を仕留たわハァ腹を切りさき。懐姙の王子まで殺した。忠節立する吳三桂。主君を捨て名を捨てゝも命惜しいか。彼奴は人前廢つた。地此の上は彼が妻の柳歌君。桁檀女を尋ぬるばかり眼を配れ功名せよと。フシ四方に別れ走り行く。地中にも降達と云ふ我武者もの。いで桁檀女を召取り一人の手柄にせんと。 鎧の上に蓑打掛け。海士の小舟に棹さしてフシ入江々々を漕廻り。地此の蘆の蔭が氣遣ひと押分くる櫂の先。 柳歌君しつかと執り力に任せ跳返せば。 舟端を踏外し眞俯向にかつぱと沈み。地浮上らんとする所を櫂も折れよとたゝみかけ。打てば沈み浮めば打ち。息もつがせず泥鼈の。 泥を泳ぐが如くにてフシ水底潜り落ち失せけり。地エヽ無用の拔駈殊に舟迄仰付けられた。渡りに舟とは此の事と。 船中に隠し置いたる劒取つて横たへ。 桁檀女を乘せ參らせ我も乘らんとせし所に。地何處より這上りけん降達鎧も濡雫。 戟提げて二十騎ばかり餘すまじと追ひかくる。ハァ忙がしや御寵候へ。敵手痛く追ひかくれば暫し防ぐ其の間。 舟底に隠れましませと。 拾ひし劒と腰の劒フシ二刀にふつて待ちかけたり。地降達程なく駈付け憎くい女め。 櫂で打つた返報と。長柄の戟おつ取りのべて突つかくる。ヲヽそつちから當てがうた此の劒こつちからも返報と。切つて廻れば二十餘人女一人に切立てられ。陸に惑へる蘆邊の鷗。一羽も立たず討たるもあり。 痛手を受けて逃ぐるもあり。柳歌君も降達も。 數ヶ所の深傷朱になつて一村蘆を押し分け〳〵。追入り追込み互の眼に血は入つたり。前後も分かぬ盲打ち岸の岩角切先に。雷光石火の命を限り危かりける三重八有樣なり。地降達戟も切折られ。 蹠寄つてむんずと組み。柳歌君が持ちたる劒。 捩取らん〳〵と捻合ふ足を踏ためず。のけ樣にかつばと伏す直に乘つて乘懸り。さし通し〳〵首ふつゝとかき切つて。莞爾と笑ひし心の内フシ嬉しさ類なかりけり。圖なう〳〵姫宮樣お身には怪我もなかつたか。 舟はそのまゝ其處にかと。よろほひ寄つて此の體では船中のお供はならぬ。 又敵が寄せ來ればもう何うも敵はぬ。 潮に任せ何處迄も落ち給へ。沖へ舟の出る迄は此の女が陸に控へた。地敵何萬騎寄せたりとも命限り腕限り。さりながら主從二度の對面は御緣と命ばかりぞや。 隨分御無事で〳〵。地南無諸天諸佛別して八大龍神。萬乘の君の姫宮の御舟を守護し給へやと。舟ばり取つて押出せば。地折しも引汐の名殘を何と桁

檀女涙しをるゝ汐風に龍神納受の沖津風。沖を遙かに流れ行くあら心安や嬉しや。よし此の上は生きのびても我が身一つ。死んでも誰を友千鳥生死の海は渡れども。夫の行方子の行方。君が行方は覺束波の浮世の海を越えかねし。渡りかねしといはばいへ此の。一心の疾風船。仁義の櫓權武勇の櫂は。折れても折れぬ沖津波寄せ來る関の聲かとて。劍にすがつてたぢたぢ〳〵。よろ〳〵よろほひ寄る方の。磯

山おろし松の風亂れし髪を掻上げて。あたりを睨んで立つたりし。和漢女の手本紙筆にも。寫し傳へけり。

第二（はまづたひ本）

燐燈たる黃鳥丘隅に止まる。人として止まる所に止まらずんば鳥に如かざるべしとかや。爰に大日本肥前の國松浦の郡。平戸の鄕に釣垂れ網引き世を渡る。和藤内三官といふ若者あり。妻も同じ海士の業藻に住む蟲の我からと。仲人なしの手枕に括り枕と締合

ひし。小睦といへる名に愛でて。フシ世を睦しく暮しけり。地そも此の和藤内が父はもと日本の者ならず。大明國の忠臣。大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが。暗き帝を諫めかね自ら長沙の罪を避け。此の日の本に筑紫潟老一官と名を改め。浦人に契りをこめ此の男子を儲けし故。母が和國の和の字を用ひ。父は唐人唐の聲をかたどつて。和唐内三官と名乗り。二十餘年の春も立ち秋も過行く十月の。小六月とて暖かや。備中鍬に魚籠提げ身の活計と夕風に。フシ夫婦連立ち出でにけり。地見渡せば沙頭に印を刻む鷗。冲洲にすだく浦千鳥。潮の干潟を鋤返し。蛤ふんで色々のオクリ貝とり。小褄しよほ〳〵濡れて。拾ひし貝は何々ぞ。寄生虫。小螺子。淺蜆貝。汐吹き上げの。簾貝ちらと見染めし姫貝に。一筆書きて送りたいらぎ口明けて。ほや〳〵笑ふフシ赤貝に心。よせ貝アゝいたら貝。君は酢貝と吸付けど。フシ我は鮑の。片思ひ。憎やそもじの螺螺に喰はせたいぞや栄螺貝。梅の花貝櫻貝蕤もせで獨り赤螺の。フシ誰を待てとや。人の海松食忘れ貝。我が二人寢のとこぶしは。身に蜆貝祝貝門出。よしの螺貝はフシ悦びの。貝とぞ取りにけり。地中に一つの大蛤日影に口を打開き。取る人ありとも白泡の汐を吹いて盛上げしは。實にや蛤能く氣を吐いて樓臺をなすと云ひしも。斯くやと見とれ居る所に。磯の蔭屑に飛渡りあさる羽音おもしろく。下り居る鳴のきつと見付け。嘴怒らしフシ只一啄と狙ひよる。詞ヤアいはれぬ鳴殿看經もする身で是がほんの殺生かい。蛤も蛤口をくわつと破戒無慙。地飛付いてかちかち〳〵。啄く所を貝合せにしつかと喰締め動かせず。鳴は俄に興さめ顔引つしやくつゝ羽たゝきし。頭をふつて岩根に寄せ打碎かんず鳥の智惠。蛤は砂地の獲物汐の溜りへ引きこまんと。尻下りに引入るゝ羽ぶしを張つてばつと立ち。一丈許りあがれども吊られ落ちては又立上り。ばつと立つてはころりと落ち。鳴の羽搔き百羽搔きフシ毛を逆立てて。ぞ諍そひける。地和藤内つく〳〵見て備中鍬からりと捨て。詞アッア面白し。雪折れ竹に本來の面目を悟り。肱を切つて祖師西來意の輪を開きしも尤かな理りかな。地我が父が教によつて唐土の兵書を學び。本朝古來名將の。合戰勝負の道理を考へ。詞軍法に心を委ねしに。今鳴蛤の爭によつて軍法の奥義一時に悟り開けたり。蛤は貝の堅きを頼んで鳴の來るを知らず。鳴は嘴の鋭に誇つて蛤の口を閉づるを知らず。貝は難さじ鳴は難れんと。前に氣を張つて後を顧みる隙なし。爰に望んで我が手も濡さず二つを一度に引掴むにいと易く。蛤貝の堅きも詮なく鳴の嘴の尖りも地遂に其の德フシなかるべし。地是ぞ兩雄鬪はしめて其の虚を討つと云ふ軍法の祕密。唐土には秦の始皇。六國を呑んだる連衡の謀。本朝の。太平記を見るに後醍醐の帝。天下に王

として蛤の大口開きし政取締めなく。相模入道と云ふ鳴鏑倉に羽叩きし。奢りの嘴するどく。吉野の千早に潮を吹かせ申せしに。楠正成新田義貞二つの貝に嘴を閉攻められ。むしり取つたる其の盛に乘つてうつせ貝。蛤ともに掴みしは逸物の高氏將軍武略に長ぜし所なり。地誠や父一官の生國は大明韃靼鳴蛤の國爭ひ。今合戰最中と傳へ聞く。哀れ唐土に渡り此の理を以て彼の理を捲し。攻戰ふ程ならば大明韃靼兩國を一呑みにせん物をと。目も放さず工夫を凝し。思ひそめたる武士の一念の末ぞ逞しき。地理かな此の男子唐土に押渡り。大明韃靼を平均し異國本朝に名を揚げし。延平王國性爺はフシ此の若者の事なりけり。地小睦遠目に喃々もう潮がさいてくる何をきよろりとしてぞいのと走り寄つて是は扨。詞鳴と蛤と口吸ふか女夫といふ事今知つた。どうやら犬の樣で見ともない。どりや地放して取らせうと笄ぬいて口押割れば。鳴も悅び蘆邊をさして滿ちくる潮に蛤のフシ則ち隱れ沈みけり。

もろこしぶね（ィホ）

ハア時雨さうないざ歸らうと。見やる洲崎に楫を絕え搖れ寄れば珍らしい作りな舟。詞鯨舟でもなし。唐の茶舟か何ぢや知らぬと舟底見れば。唐土人とおぼしくて二八餘りの上臈の。地芙蓉の顏容柳の眉袖は涙の汐風に。化粧も剝けて面痩せて。哀れにも美しく雨に萎れし初花に。フシ目鼻を付けし如くなり。詞小睦小聲になりありや繪に書いてある唐の后。淫奔して流された物ぢやわいの。アヽさうぢや〳〵よい推量。俺は惡う合點して。楊貴妃の幽靈かと思うて怖かつた。何でもよい女房ぢやないかいな。ムウいやらしに唐の女房が目につくか。親父樣が始の樣に唐にござつて。此方もあつちで生れたら。あの樣な女房抱いて寢さしやらうが。日本に生れた因果にわしが樣な女房持つて口惜しからうの。ハテひよんな事ばかり。なんぼ美しうても地の女房の地衣裳付頭付。辨財天を見る樣で勿體なうて氣が張つて。フシ寢らねはせぬとぞ笑ひける。地其の隙に上臈濱邊におりて夫婦を招き。詞日本人〳〵。南無きやらちよんのうとらやあ〳〵とありければ。地小睦ふつと笑ひ出し。ありや何といふお經ぢやと腹を捧へてをかしがる。詞ヤイ〳〵笑ふなあれは日本人笑へおじや。頼みたいと云ふ事とおしのけて立寄れば。地上臈涙にくれながら。詞大明ちんしんにようろ。君けんくるめいたるりんかんきう。さいもうすがすんへいするともこんたかりんとんな。ありしてけんさんはいろ。とらやあ〳〵地とばかりにてフシエテ又さめ〴〵と泣き給へば。地小睦は濱邊にころりと伏しフシ腹筋捻つて堪へかぬる。地和藤内は常々父が詞の唐語覺え。はつと手を突き頭を下げ。詞うす〳〵うさすはもう。さきがちんぷりかくさくきんないろ。きんにやう〳〵と手を打つて。

地互にしみ〴〵手を取組み。スエテ悲歎の涙睫じし。地小睫くわつと急上げ胸ぐら取つて是男。詞唐人詞聞きたうない。いかに淫奔すればとて何時の便宜に唐三界。餘りな稼ぢや。やいそこなとらやあや。こつちの大事の男をようも〴〵きんにやう〳〵にしたなあ。日本の男の鹽梅は吸うて見る事もなるまい。地此の鹽海喰うて見よと備中鍬振上ぐれば和藤内ひつたくり。詞ヤイ目を明いて惜氣せい。是こそ日頃語りし父一官の古への主君。大明の帝の御妹柄檀皇女。國の亂にて吹流され給ふとの御物語見捨て難なく悼はしゝ。直に我が家へお供せば庄屋の斷り。代官所の詮議何のかのと喧しし。地兎角親父と談合おぬしは内へ歸つて早々是へ同道せい。人の見ぬ中早う早うといひければ小睫もはつと手を打つて。扨も〴〵おいとしや同じ日本の内さへも。王位高貴の姫君は荒い風にも當ぬと聞く。ましてや是は見ぬ唐土の玉胤のあさましき御姿や。所も多きに爰へお舟の寄る事も。主從の御縁深き故。追付け親父樣呼うで來ませう。ア、お愛しのとらやあや。きんにやう〳〵と涙にくれオクリ家路にこそは歸りけれ。フシ斯くとは知らず。地一官夫婦不思議の瑞夢蒙りしと。當國松浦の住吉に詣で歸るさの濱傳ひ。喞々〴〵と地聲をかけて招寄せ。柄檀皇女亂國を遁れ御舟是へ流れ寄る。悼はしき樣と聞きも敢ず一官夫婦。あつと頭を地に着けて。詞御聞及びも候はん某は古への鄭芝龍と申す者。只今の妻や子は日本の者にて候へども。舊恩を報ぜずんば忠臣の道立つべからず。某こそ年寄つたれ此の倅兵事軍術を睹み。御覽の如く骨太に生れ付き大膽不敵の剛力者。今一度大明の御代に飜し。冥土に在す先帝の宸襟を安んじ奉らん。地御心安く思召せと世に賴もしく申し上ぐれば。皇女御涙にくれ給ひ。扨は聞及びたる鄭芝龍とは御身よの。地李陷天が悪逆韃靼國と心を合せ。兄帝を失ひ國を奪ひ。妾も既に害せられんとしたりしを。地吳三桂夫婦の臣が介抱にて。今日の今迄惜しからぬ露の命のつれなさを。賴むとばかり宣ひて又さめざめと泣き給ひ。地互に通ずる詞の末。緣につれば唐の物悔の八千度繰返す。フシ昔語りぞ哀れなる。地母も袂を絞りかね實に誠斯樣の事を承らん兆にや。詞今朝曉夫婦かはらぬ夢の告げ。軍は二千里を出でて西に利ありといふ事を。まざ〴〵と見て候。ヤア和藤内。此の夢を考へ君御出世の忠勤を勵むべし。いかに〴〵とありければ和藤内謹んで。只今某此の濱にて鳴の鳥と蛤稀代の業を見受けしより。軍法の蘊奥を悟り開いて候。地千里を出でて西に利ありとは大明國は我が國より西に當つて千里の波濤軍法の法の字は三水に去と書く。三水は水なり水を去るとは此の出汐の水に任せ。早く日本の地を去るべしとの神の告。我等が本卦師の卦に當つて。詞師は軍の義なり。

坤上坎下の卦體。一陽を以て衆陰を統ぶるといつぱ。我が一身を以て數萬騎の軍兵を從へ有つ大將。今三水の滿潮に早く日本の地を去つて。地南京北京に押渡り浮世に存へあるならば。吳三桂と軍慮を合せ李蹈天が賊徒を滅し。軍勢催し韃靼へ逆寄に押寄せ。韃靼頭の芥子坊主。捻首筒拔追伏せ。切りふせ。御代長久の凱歌を上けん事和藤内が心魂に。フシ徹する所。地天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かず。吉凶は人によつて日によらず。此儘直に御出船道すがら島々の夷を語らひ案の中なる軍せん御出陣と勇しは。三韓退治の神功皇后艤舳に立ちし荒御前を。今見る如き勢也。地父は大きに感心しチヽ潔し頼もしし。誠や一粒の花の種は地中に朽ちず。終に千輪の梢に上るといふ本文。フシ實に一官が子なるぞや地我々夫婦も同船にて御供申すべきが。詞大勢は目に立つて所々の渡海の番所。國の咎め恐あり。夫婦密に藤津の浦より出船すべし。地お事は是より乘出し便りよき小島に姫宮を預け置き。舟路をかへて追付けよ。親子が忠心正直の頭に宿る神風は。船中何の氣遣ひなし。出合ふ所は唐土に隱れなき。千里が竹にて相待つべし。急け〳〵と姫宮にお暇申し オクリ夫婦はへ遙かに別れ行く。

地和藤内姫宮の御手を引き。元の唐船に移し乘せ參らせ。押出さんとする所に。女房息を切つて走り付き。船の纜確と取り。詞ムウ内には親父樣母樣も皆お留守。異な事と思ひしに道理こそ是ぢや物。親子篤と談合しめ。親御の國からお内儀呼び。此の小睦を置去りに親子夫婦四人づれ。唐へ身代引く氣ぢやの。餘酷いつれない。何の見落仕落がある。唐高麗は愚かの事天竺雲の果迄も。共に連れんと言ひかはした二人の中。仲人もない挨拶ない二人が胸と胸とに。起請も誓紙も納めてある。地なんほう飽れた中なりとも今迄の情に。せめて同じ舟に乘せ。五里も十里も冲中の波に沈めて。鯨や鮫の餌になりとも。夫の手から殺して下され藤内殿と。鮎板を叩き泣きくどきスエテ放さん氣色はなかりけり。地エヽ大事の門出不吉の泣面。其處立退け目に物見せんと櫂振上ぐれば。姫宮あわて縋付き。止め給ふを押しのけ櫂も折れよと舷端敲き。威に打つを身に受けて。打たれて死ねば本望と。濱邊にどうど臥轉び聲も。惜まず歎きしが。詞エヽ是でも死なれぬなア。よし〳〵今は是迄結構者も事による。地此の海底に身を沈め瞋恚は嫉妬の大蛇となつて。もとの契りは今日の仇今に思ひ知らせんと。石を袂に拾ひ入れ巖の肩に攀上れば。駈上つて和藤内抱きとめて。詞ヤイこりや粗相すな心底見付けた。軍なかばの大明國事太平に治まる迄。姫宮を汝に預け日本に止め置かんと思へども。筋なき女の心を窺ひ慰とつれなく見せたるぞ。是四

百餘州と釣替の姫宮をしつかと預置くからは。男の心替らぬ證據。姫宮に仕へ奉るは舅に孝行夫に仕ふる百倍ぞや。地命にかけて頼入る。國治まつて迎のお船のお供せよと宥むれば聞入れて此方には氣遣ひせず。地隨分無事でござれやと。いへども弱る女心。せめて一夜の覺悟もせず夢見た樣な別れやと。夫の袖に縋付きゝエテわつとばかりに。泣叫ぶ心の。内ぞやるせなき。地和藤内も胸塞り。至極の思ひに目も眩み フシ共に心は亂るれど。地斯くては果てじいざさらば。さらば〳〵の暇乞桁檀女も涙ながら。詞追付け迎ひの輿を待つ。其の時伴ひ歸るべし必ず早うと宣へば。地畏つて和藤内泣く〳〵舟を押出す。又纜に取付いて言ひ殘せし事のあり。暫くなうと引留むる。エ、聞分なしと引切つて舟を深みに漕出せば。詮方波に身を浸し。只手を上げて舟よなう。舟よと呼べど出舟の。かひなき巖に駈上り。足を

爪立て延上り。見送る影も遠ざかる。唐土の望夫山我が朝の領巾麾山。今の我が身の我が思ひ。石ともなれ山ともなれ。動かじ去らじと搔口說き淚限り聲限り。互に呼ばれ招かれて姿を隱す汐霧り聲を。隔つる沖津波沖の。鷗磯千鳥泣きこがれてぞ三重八

（千里が新一本）

江戸別れ行く船路の末も。不知火の。筑紫は雲に埋めども跡に。擁護の。神風や千波萬波を押切つて。時も違へず親子の丹フシ唐土の地にも着きにけり。地鄭芝龍一官は故鄉へ歸る唐錦。裝束引替へ妻子に向ひ。詞我が本國といひ乍ら時遷り代變り。天下悉く李蹈天が引入れにて。韃靼夷の奴となり。地昔の朋友一族とて誰を尋ねん樣もなく。司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば。詞何を以て義兵の族を揚げ。何國を一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年此の國を立退き。日本へ渡

る時二歳になりし娘の子を。乳母が袖に捨置きしが。其の子が母は産落して當座に死す。地斯くいふ父は八重の汐路の中絶えて。いつ父母も知らぬ身が育てば育つ草木の。スエテ雨露の恵に長ずる如く。飼天地の父母の助けにや。成人して今五常軍甘輝といふ大名。一城の主の妻となる由商人の便りに聞及ぶ。頼む方は是ばかり。親を慕ふ心ありて娘さへ承引せば。聟の甘輝もやす〳〵と頼まるべし。是より道の程百八十里。打連れては人も怪しめん。地我一人道を變へ和藤内は母を倶し。日本の漁船の吹流されしと。頓智を以て人家に憩ひ追付くべし。詞是より先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。江戸地それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の棲む所。風景聳えし。高山は赤壁とて。昔。東坡がフシ配所ぞや。それよりは甘輝が在城。獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待構へ。萬事を諜合はすべしと。方角とても白雲の。日影を心覺えにて東西。へこそへ〳〵三重別れけれ。地教に任せ和藤内人家を求め忍ばんと。かひ〴〵しく母を負ひたづきも知らぬ岩巌石。古木の根ざし灘津波。飛越え跳越え飛鳥の如く急げども。末果てしなき大明國。人里絶えて廣々たるフシ千里が竹に迷ひ入る。地和藤内ほうどくわを抜かし。詞なう母者人。此の臑骨に覺えあり。もう四五十里も來ませうが。人にも猿にも逢ふ事か。行けば行く程藪の中ムウ合點たり。方角知らぬ日本人。唐の狐がなぶるよな。地魅さば魅せ宿なし旅は行着き次第。小豆の飯の相伴と根笹大竹押分け。踏分け猶奥深く行く先に。怪しや數萬の人聲攻鼓攻太鼓。喇叭太平簫高音をそしらぇクリ ひやう〳〵。とこそ聞えけれ。地すは我々を見咎めて敵の取巻く攻太鼓か。又は狐のなす業かとスエテ茫然たる其の折ふし。コハリ空凄まじく風起り。砂を穿ちどう〳〵どう。竹葉颯と巻立て〳〵吹ぶる。竹はナホス劔の如くフシすさまじなんども愚かなり。地和藤内ちつとも臆せず讃めたり〳〵。詞扨は異國の虎狩な。あの鉦太鼓は勢子の者。爰は聞ゆる千里が原。虎嘯けば風起る猛獣の所爲と覺えたり。廿四孝の楊香は孝行の德によつて自然と遁れし惡虎の難。地其の孝行には劣るとも忠義に勇む我が勇力。唐へ渡つて力始め。神力ます〳〵日本刀又で向ふは大人氣なし。虎は愚か象でも鬼でも一挫ぎと。尻引つからけ身づくろひ母を圍うて立つたるは。西天の獅子王も。フシ恐れつべうぞ見えてけり。案に違はず吹く風と共に荒れたる猛虎の形。ふし根に面をすりつけ〳〵岩稜に爪とぎ立て。二人を目がけ蜼みかゝるを事ともせず。コハリ弓手に擲り馬手に受け。捩つて懸れば身をかはし撓めば。ひらりと乘り移り。上になり下になり命競べ根競べ。聲を力に怒いる〳〵。虎の怒り毛怒り聲ナホス山も崩るゝ三重〳〵如くなり。地和藤内も大童虎も

半分毛を毟られ。兩方ともに息疲れ石上に突立てば。虎も岩間に小首を投げ。大息ついだる其の響。フシ吹鞴吹くが如くなり。母藪陰より走出で。詞ヤア〳〵和藤内。神國に生れて神より受けし身體髮膚。畜類に出合ひ立てして怪我するな。地日本の地は離るるとも神は我が身に五十鈴川。大神宮の御祓納受などかならんやと。肌の守りを渡さるれば實に尤と押戴き。虎に差向け差上ぐれば。神國神秘の其の不思議猛りに猛る勢も。忽ち尾を偃せ耳を垂れじりり〳〵と四足を縮め。恐れわなゝき岩洞に隱れ入る。尾筒を摑んで跳ねかへし。打伏せ〳〵怯む所を乘懸り。足下にしつかと踏まへしは天斑駒素蓋鳴の。尊の神力天照フシ神の威德ぞ有難き。地かゝる所に勢子の者群り來る其の中に。大將と思しき者大音上げ。詞ヤア〳〵汝奴は何國の風來人。我が功名を妨ぐる。其の虎は忝くも主君右軍將李蹈天より。韃靼王へ獻上の爲狩出したる虎なるぞ。早々渡せ異議に及ばゝ打殺さんしやぐわん フシ〳〵と喚きける。地李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑つほに入り。詞ヤア餓鬼も人數しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本風來とは舌長し。左程欲しがる虎ならば。主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら。爰へ突出し詫言せい。直に逢うて用もある。さもない内はいかな事ならぬ。〳〵と睨付くる。ヤア地物ないはせそ討取れと一度に劍をはらりと拔く。心得たりと守りを虎の首にかけ。母の傍に引据ゆればフシ槃ざし如くに働かず。ヲヽ心安しと太刀さしかざし群る中へ割つて入り。八方無盡にフシ割立て〳〵撫搔くる。地勢子の大將安大人官人引具し立歸り。詞おのれ老耄餘さじと一文字に切懸る。地猶も神明擁護の驗神力虎に加はつて。むつくと起きて身慄ひし。敵に向ひ齒を鳴らし猛りうなりて飛蒐る。こは敵はじと安大人勢子の者が差いたる劍。狩鉾數槍手に當るを幸に投付け〳〵三重へ打ちかくる虎は神力自在を得。劍を宙に引咬へ〳〵。岩に打當て微塵になす。刄の光り玉散る霰。氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内どつこいやらぬと顯れ出で。安大人が素首を摑んで差上げ。くる〳〵と振廻しゐいやつと打付くれば。地岩に熟柿を打つ如くフシ五體ひしげて失せにけり。地此の勢に官人ばら跡へ戻れば惡虎の口。先へ行けば和藤内仁王立に突立つたり。詞アヽ申し御堪忍。地御免々々と手を合せフシ土に喰付き泣き居たる。詞和藤内虎の背を撫でて。うぬらが小國とて侮る日本人。虎さへ怖がる日本の手並み覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴。九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮柄檀皇女に巡りあひ。三世の恩を報ぜん爲。父が故鄕へ立歸り國の亂を治むるなり。サア命惜しくば味方に付け。いやといへば虎の餌食。

否か應かと詰めかくる。ナウ何の否でござりましよ。韃靼王に從ふも李陷天に從ふも。命が惜しさ向後お前の御家來ども。お情頼み奉ると地に鼻着けて畏る。地ヲヽ出來した〳〵さりながら。我が家來になるからは日本流に月代そつて元服させ。名も改めて召仕はんと。指添の小刀はづさし是も當座の早剃刀。母も手々に受取つて。並ぶ頭の鉢の水揉むや揉まずに無理無體。片端剃るやらこぼつやら。絲鬢厚鬢剃刀次第。瞬く間に剃りしまひ二梯半のはらけ髪。頭は日本髭は韃靼身は唐人。互に顔を見合せて。頭冷づく風引いて。嘘々。村さめ〳〵と フシ涙を流すぞ道理なる。地親子どつと打笑ひ。揃ひも揃うた供廻り名も日本に改めて。詞何左衛門何兵衛。地太郎次郎十郎迄面々が國所。頭字に名乗二行に立つてぼつ立てろ。コハリ承り候と。お先手の手振りの衆ちやく忠左衛門東蒲塞右衛門。呂宋兵衛東京兵衛。遥羅太郎白城次郎ちやるなん四郎。ほるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎。もうる左衛門じやが太郎兵衛。さんとめ八郎英吉利兵衛今參りの御供先。跡に引馬虎斑の駒母を。助けてナホス孝行の。名を取り口取り國を取る譽は。異國本朝に。踏跨けたる鞍鐙。虎の背中に打乘つて威勢を。千里に顯せり。

第三

地仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず。慈ある父も益なき子は愛する事能はず。大和唐土樣々に道の巷は別るれど。遥はで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて。親子三人巡り合ひ我が聟とばかり聞及ぶ。五常軍甘輝が館城フシ獅子が城にぞ着きにける。地聞きしに優る要害はまだ冴返る春の夜の。霜に閃く軒の瓦鯱鉾天に鰭振りてスエテ石壘高く築上げたり。地濠の水藍に似て繩を引くが如く。末は黄河に流れ入り樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧すく。矢狭間に弩隙間なく。所々に石火矢を仕掛け置きすはといはゞ。打放さん其の勢 フシ和國に。目馴れぬ要害なり。地一官案に相違し亂世といひ。斯る嚴しき城門事々しく。夜中に敲き聞きも馴れぬ鬪が。日本より來りしなんどいふとも誠と思ひ取次ぐ者もあるまじ。地假令娘が聞きたりとも二歳で別れ。日本へ渡りし父と如何なる證據を語るとも。容易く城内へ入れんことかたかるべし。如何は。フシせんとぞ呟きける。地和藤内聞きもあへず。詞今更驚く事ならず一身の外味方なしとは。日本を出づる時より覺悟の前。遂に見ぬ聞よ聟よと親みだてして。不覺を取らんより頼まれうか賴まれぬか一口商ひ。否といはゞ即座の敵。地二歳で別れし娘なれば我等とも行逢姉。彼奴孝行の心あらば日本の風も懐しく。女の便りもあるべきに頼まれぬ心底。我竹林の虎狩に從へし島夷を。地軍兵の元手にして切靡ける程ならば。五萬や十萬勢の付くは隙いらず。何の人頼み此の門蹴破り不孝の姉が首捻切り。

聖の甘輝と一勝負と。躍り出づれば母縋りつき押しとゞめ。詞其の娘御の心入は知らねども。夫につれて世の中の儘にならぬは女の習ひ。父とは親子御身とは胤一つ。地他人は自ら一人にて海山千里を隔てゝも。繼母といふ名は遁れず。娘の心に親兄弟戀慕ふまい物でもなし。其の所へ切込んで日本の繼母が妬みなりといはれんは。我が恥ばかりか日本の國の恥。詞御身不肖の身を以て韃靼の大敵を攻破り。大明の御代に返さんと大義を思ひ立つからは。地私の恥を捨て我が身の無念を堪忍し。人を懷け從へ一人の雜兵も。味方に招き入るゝこそ。軍法のフシ元と聞く。地況して聖の甘輝は一城の主。一方の大將是を味方に頼むこと。大方にてなるべきか心をフシ修めフシ案内せよと制すれば。詞和藤内門外に大音上げ。五常軍甘輝公に直談申したき事あり。開門々々と敲きしは城中響くばかりなり。當番の兵士聲々に。主君甘輝公は大王の召によつて。昨日より出仕あり何時御歸りも計られず。御留守といひ夜中といひ。何者なれば直談とは推參至極。いふ事あらばそれから申せ。御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼ばはりける。一官小聲になりいや人傳に申すことならず。甘輝公が留守ならば御内室の女性へ直に逢うて申すべし。日本より渡りし者と申せば合點のある筈と。地いひも果てぬに城中騒ぎ。我々さへ面も拜まぬ御臺所。對面せんとは不敵者殊に日本人とや。油斷するなと高提灯銅鑼鐃鈸を打立てく。塀の上には數多の兵鐵砲の先揃へ。石火矢放して打ちみしやけフシ火縄よ玉よと犇きける。地奥へかくとや聞えけん妻の女房樓門に駈上り。詞アヽ騒ぐなく。聞屆けて自からがそれよと聲をかくる迄。鐵砲放すな粗忽すな。ナウく門外の人々。五常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事。天下悉く韃靼の大王に靡き。地世に從ふ我が夫も大王の幕下に屬し。此の城を預り守り嚴しき折も折。夫の留守の女房に逢はんとは心得ずさりながら。日本とあれば懐しし身の上を語られよ。聞かまほしやといふ中にも若しや我が親か。何故尋ね給ふぞと心もとなき危なさに。慎しさも先立つて兵ども粗相すな。むさと鐵砲放すなとフシ心遣ひぞ道理なる。地一官も初めて見る娘の顔も朧月。涙に曇る醉を上げ。詞粗忽の申し事ながら。御身の父は大明の鄭芝龍。母は當座に空しくなり父は逆鱗被り。日本へ身退く其の時は二歳にて。地親子名殘の憂き別れ辨へなくとも乳母が嘸。物語にも聞きつらん我こそ父の鄭芝龍。日本肥前の國平戸の浦に年を經て。今の名は老一官。詞日本で儒けし弟は此の男。是なるは今の母。地蜜に語り頼みたき事あつて。成果てし此の姿恥を包まず來りしぞ。門を開かせたべかしとフシ染々口說く詞の末。地思ひ當りて錦祥女扨は父かと飛下りて。縋りつきたや顔見たや心は千々に亂るれど。さすが一

城の主甘輝が妻。下下の見る所涙を押へて一々覺えある事ながら。證據なくては胡亂なり自らが父といふ。證據あらば聞かまほしと。詞いふより兵口々に證據證據を出せく。ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし。地そりや曲者よと鐵砲の筒先。一度にはらりと突懸くる和藤内かけ隔て。詞無用の鐵

砲ほんともいはせば撫切りにしてくれん。地イヤしやつめともに遁すなと火蓋を切つて取り圍み。證據證據と責めかけてッシ既に危く見えけるが。詞一宮兩手をあけてア、是々。證據は其方にある筈。一歳唐土を立ちのく時。成人の後形見にせよと。我が形を繪に寫し乳母に預置きつるが。地老の姿は變るとも俤殘る繪に合せ。疑を晴れ給へなう其の詞がはや證據と。肌に放さね姿繪を高欄に押開き。柄付の

鏡取出し月に映ふ父の顔。鏡の面に近々と寫し取つて引比べ。地引合せてよく〳〵見れば繪にとゞめしは古への。顔も艶ある翠の鬢鏡は今の老窶れ。頭の雪と變れども變らで殘る面影の。目もと口もと其の儘に我が影にもさも似たり。父方讓りの額の黒子親子の證疑なし。扨は誠の父上か。なう懐しや懐しや母は冥途の苦の下。日本とやらに父上ありとばかりにて。便りを聞かん知邊もなく。東の果と聞くからに。明くれば朝日を父ぞと拜み。暮るれば世界の圖を開き是は唐土是は日本。父は爰にましますよと繪圖では近い樣なれど。三千餘里のあなたとや此の世の對面思ひたえ。若しや冥途で逢ふ事もと死なぬ先から來世を待ち。歎き暮し泣き明し二十年の夜晝は。我が身さへ辛かりしよう生きて居て下さつて。父を拜む有難やと聲も惜まぬ嬉し泣き。一官は咽返り樓門に縋りつき。見上ぐれば見下ろして。心餘りて詞なく フシ盡きぬ。涙ぞ哀れなる。地武勇に逸る和藤内母諸共に伏沈めば。心なき兵も零す涙に鐵砲の フシ火繩も濕るばかりなり。地稍あつて一官我々是へ來る事。詞翠の甘輝を密に賴みたき一大事。先づ〳〵御身に語るべし門開かせて城内へ入れてたべ。なう仰せなくとも是へと申す筈なれども。此の國未だ軍半ば。韃靼王の掟にて親類緣者たりとも。他國者は城内へ堅く禁制との掟なり。されども是は格別こりや兵ども。地如何せんとありければ料簡もなき唐人ども。いや〳〵思ひもよらぬ事ならぬ〳〵。詞歸去來〳〵。ぴんくわんたさつ。ぶおん〳〵と地又鐵砲を差向へば。人々案に相違して フシ呆れ果てゝ見えけるが。地母進み出でた々。詞大王より掟とあれば力なしさり乍ら。年寄つた此の母(はゝィ)に何の用心入るべきぞ。かの姫に只一言物語りするばかり。妾一人通してたべ誠浮世の情ぞと。地手を合せても聞なし。詞然らば我々料簡して城内にある中は。繩をかけて縛置き繩付にして通せば。韃靼王へ聞えても主君の言譯我等が身晴れ。地急いで繩をかゝれよそれがいやなら。詞歸去來〳〵ぴんくわんたさつ。フシぶおんおんと睨めつくる。詞和藤内眼をくわつと怒らし。ヤィ毛唐人。うぬらが耳は何處に付いて何と聞く。忝くも鄭芝龍一官が女房身が母。姫の爲にも母同然。犬猫を飼ふ樣に繩付けて通さんとは。日本人は鈍な事聞いて居ぬ。こむつかしい城内入らいでも大事ない。サァござれと引立つる母振放し。それ〳〵今いひしを忘れしか。大事を人に賴む身は幾度か樣々の。憂き目もあり恥もあり。繩は愚か足桎手梏にかゝつても。願ひさへ叶はば瓦に金を換ゆるが如し。地小國なれども日本は男も女も義は捨てず。繩かけ給へ一官殿と恥ぢしめられて力なく。用心の腰繩取出し高手小手に縛り上げ。親子顔を見合せて笑顔をつくる日本の。フシ人の

育ちぞ健氣なる。地錦祥女も堪兼ぬる歎きの色を押包み。何事も時世にて國の掟は是非もなし。母御は自らが預る上は氣遣ひなし。何事か存ぜぬども御願の一通り。お物語承り夫甘輝に言聞かせ。何とぞ叶へ參らせん。詞扨此の城の廻りに掘つたる濠の水上は。自らが化粧殿の庭より落つる遣水の。末は黄河の川水と流れ入る水筋なり。地夫の甘輝が聞入れて御願ひ成就せば。白粉解いて流すべし川水白く流るゝは。目出度き證と思召し勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずば紅を解いて流すべし。川水赤く流るゝは叶はぬ左右と思召し。母御前を請取に門外まで出で給へ。善惡二つは白妙と唐紅の川水に。心を付けて御覽ぜよさらば。〳〵と夕月に門の戸さつと押開き伴ふ母は生死の境。菩提門を引き替て。是は浮世の無明門。貫の木丁どおろす音。錦祥女は目も暮れて弱きは唐土女の風。和藤内も一官も。泣かぬが日本武士の風。大手の門の閉開に石火矢打つは韃靼風。一つに響く石火矢の音に。聞くさへ三重〳〵はるかなる。夢も通はぬ。唐土にオクリ通へば。通ふ親子の緣。恩愛の綱結び合ひ。結ぶ餘りの縛繩かゝる例は異國にも。まれに咲きだす雪の梅。色音は同じ鶯の フシ聲にぞ通事入らざりし。地錦祥女は孝行深く。母を奥の一間に移し二重の褥三重の蒲團。山海の珍菓名酒を以て。重んじ待遇す有樣は天上の榮華とも又高手小手の縛めは十惡五逆の科人とも見る目いぶせく痛はしく。樣々に宮づかへ誠の母と勞はりし フシ心の内こそ殊勝なれ。地腰元の侍女ども寄集り。詞なんと日本の女子見てか。目も鼻も變らぬが可笑しい髪の結樣。變つた衣裳の縫樣若い女子もあれであらう。裾も褄もほら〳〵ほらと。ぱつと風が吹いたら太股まで見えさうな。ア、恥かしい事ぢやあるまいか。いや〳〵とても女子に生れるなら。こちや日本の女子になりたい。何故といや。日本は大きに和らぐ大和の國といふけな。何と女子の爲には大きに和かなは好もしい國ぢやないかの。ホウ有難い國ぢやのと。フシ目を細めてぞ頷きける。地錦祥女立出で是是面白さうに何いふぞ。あなたは自らとは生さぬ中の母上なれば。孝行といひ義理といひ。誠の母より重けれども國の掟せん方なく縛り搦めるおいとしさ。地韃靼王へ洩聞え良人に咎あらうかと。宥免もなり難く難儀といふは我が身一つ。何れも賴む食物も違ふとや。お口に合ふ物伺うて。進ぜてくれよと宣へば。詞いや申し如才もなうお料理も念入り。龍眼肉のお飯。お汁は家鴨の油揚豚の滾汁羊の濱燒。牛の蒲鉾樣々にして上げても。なういま〳〵しい其樣物嫌々。縛られて手も叶はぬつい握飯をしてくれと御意なさるゝ。其の握飯といふ喰物は何の事やらどうも合點參らず。皆打寄つて詮議致せば。日本では相撲取りをむすびと申すげな。地それゆゑ方々尋ねても。折

も悪うお齒に合ひそな相撲取が。フン切物なりとぞ申しける。地表に轟く馬車御歸館と呼ばはつて。唐櫂先に舁入れさせ優々たる絹傘もさすが五常軍甘輝と名に負ふ其の物體。錦祥女出迎ひ何とて早き御退出御前は何と候ぞや。詞されば〳〵。韃靼大王叡慮深く過分の御加增。十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ。諸侯王の冠裝束賜り。大役仰付けらるゝ。家の面目是に過ぎずとありければ。それはお手柄目出たい〳〵。なう家の吉事は重なる物。日頃戀しいゆかしいと申し暮せし父上。日本にて儲け給ひし母兄弟頼みたき事ありとて。地門外迄來り給へどもお留守といひ。嚴しき國の掟を憚り。男子は皆遁し母上ばかりを留置きしが。猶も上の聞えを恐れ繩かけてあれあの。奥の亭にて御馳走は申せども。胎内借らぬ母上繩かけし御心底。ヱヱ悲しさよとぞ語りける。詞ムウ繩かけしとは能い料簡。上へ聞えて言譯あり。地隨分褒應せいさ先づ我も對面せん。案内申せといふ聲の漏れ聞えてや。妻戸の内。なう錦祥女甘輝殿のお歸りか美は餘り高上り。地妾それへと立ち出づる容貌はいとど老木の松の。しめからまれし藤葛フン立居。苦しき其の風情。地甘輝見る目も痛はしく。誠世の中の子と云ふ者のあればこそ。山川萬里を越え給ふ其のかひもなき縛めは。時代の掟是非もなし。詞それ女房お手が痛むか氣を付けよ。地優曇華の客人聊か疎略を存ぜず。何事なりとも此の甘輝が身に相應の事ならば。必ず心置かるゝなと睦しく待遇せば。老母顔色打ちとけてヲヽ頼もしい忝い。其の詞を聞くからは何しに心置くべきぞ。頼入り度き大事密に語り申したし是へ〳〵と小聲になり。詞なう我々此の度唐土へ渡りし事娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬肥前の國松浦が磯といふ所へ。大明の帝の御妹梅檀皇女小船に召され吹流され。御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと齊しく。父は素より明朝の廢臣。我が子の和藤内と申す者賤しき海士の手業ながら。唐土日本の軍書を學び。韃靼大王を滅し昔の御代に翻し。姫宮を帝位に卽けんと先づ日本に殘し置き。親子三人此の唐土へは來たれども。地あさましや草木迄皆韃靼に隨ひ靡き。大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿。力を添へて下されかし偏に頼み參らする。是が拜む心ぞと額を膝に押しさげ〳〵。只一筋の志ヱヱ思ひ込うでぞ見えにける。地甘輝大きに驚き。ムウ。詞扨は聞及ぶ日本の和藤内と申すは。此の錦祥女とは兄弟鄭芝龍一官の子息候なム、武勇の程唐土迄も隱れなく。頼もしき思ひ立ち尤斯うこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下。帝亡び給ひてより頼むべき主君なく。韃靼の恩賞蒙り月日を送る折柄望む所の御頼み。早速味方と申したきが少存ずる旨あれば。急にあつとも申されず篤と思案しお返事をと。いはせも

果てずァ、そりや御卑怯な詞が違ふ。是程の大事口より出せば世間ぞや。地思案の間に漏れ聞えて不覚を取り悔んでも返らず。お恨みとは思ふまじ成れ成らざれお返事を。サァ只今と責めつくれば。詞ムウ急に返答聞きたくば易い事〳〵。如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なりと。地いふより早く錦祥女が胸元取つて引寄せ。剣引抜いて咽吭に差當つる。地老母周章て飛蒐り二人が中へ割つて入り。持つたる手を踏放し娘を背中に押しやり〳〵。仰向に重なり臥大聲上げて。地是情なや何事ぞ人に物を頼まれては。女房を刺殺すが唐土の習ひか。心に染まぬ無心を聞くも。女房の縁ある故と心腹が立つての事か。但は狂氣かたまたま始めて來て見たる。母親の目の前で殺さうとする無法人。日頃が思ひやられた味方をせずばせぬ迄よ。今迄と違うて親のある大事の娘。是怖い事はない。母にしつかと取りつきやと。地隔ての垣と身を捨てゝ

閑ひ歎けば錦祥女。夫の心は知らねども母の情の有難さ。怪我遊ばすなと フシばかりにて共に。涙に咽びけり。地甘輝飛退つてチ、御不審御尤。詞全く某無法にあらず狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し。此の頃日本より和藤内といふえせ者。少乏下劣の身を以て智謀軍術遅しく。韃靼王を傾け大明の世に飜へさんと此の土に渡る。彼が討手誰ならんと數千人の諸侯の中より。此の甘輝を選出され散騎將軍の官に任じ。十萬騎の大將を賜る。和藤内を我が妻の兄弟と今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く楠とやらんが肝臓を出で。朝比奈辨慶とやらんが勇力ありとも。我亦孔明が腸に分け入り。樊噲項羽が骨髓を借つて一戦に追つて追ひまくり。和藤内が月代首提げて來らんと。虜言吐きし某が。地一太刀も合せず矢の一本も放さず。ぬく〳〵と味方せば五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖ぢする者でなし。女に絆され縁に引かれ腰

が抜けて弓矢の義を忘れしと。韃靼人の雑口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し。恩愛不便の妻を害し女の縁に引かれざる。義信の二字を額に當てさつぱりと味方せん爲。詞ヤイ錦祥女。留むる母の詞には慈悲心籠り。殺す夫の剣の先には忠孝籠る。地親の慈悲と忠孝に命を捨てよ女房と。理非を飾らぬ勇士の詞。チ、聞分けた身に適うた忠孝親に貰うた此の體。孝行のため捨つるは惜しいとも思はぬと。母を押しのけつゝと寄り胸押明くれば引寄せて。見る目危き氷の剣なう悲しやと斷隔て。押分けんに詮方なく退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰付いて引退くれば夫が寄る。夫の袖を咥へて引けば。娘は死なんと又立寄るを口に咥へて唐猫の。賊を換ゆる如くにて母は目もくれ身も疲れ。わつとばかりにどうと伏し前後。不覚に。見えければ。地錦祥女縋りつき一生に親知らず。終に一度の孝行なく何で恩を送らうぞ。死

なせて給べ母上と口説き歎けばわつと泣き。なう悲しい事いふ人や。殊に御身は婆婆と冥途に親三人。殘り二人の父母は產落した大罪あり。中に一人の此の母は憐みかけず恩もなく。うたてや繼母の名は削つても削られず。地今爰で死なせては。詞日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで見殺しに殺せしと。我が身の恥ばかりかは普く口々に日本人は邪慳なりと。地國の名を引出すは我が日本の恥ぞかし。唐を照らす日影も日本を照らす日影も。光に二つはなけれども。地日の本とは日の始め仁義五常情あり。慈悲專らの神國に生を受けた此の母が。娘殺すを見物し。そも生きて居られうか。願はくは此の繩が日本の神神の注連繩と顯れ。我を今絞殺し屍は異國に曝すとも。魂は日本に導き給へと聲を上げ。道もあり情もあり哀れも籠るくどき泣き。錦祥女は縋りつき母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して。不覺涙に暮れけるが。地やゝあつて甘輝席を打つて。ハツア是非もなし力なし。母の承引なき上は今日より和藤内とは敵對す(ィ本すアナシ)。老母を是に留め置き。人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り返し參らせよ。いや送る迄もなく。地此の遣水より黃河迄よき便りには白粉流し。叶はぬ知らせは紅を流す約束にて。迎ひにお出ある筈いで紅解いて流さんと。ワキ常の〳〵一間に入りにけり。ツレ母は思ひに。かきくれて。地思ふに違ふ世の中を立歸りて夫や子に。何と語り聞かせんと思ひやる方涙の色。紅より先の唐錦。地錦祥女は其の際に瑠璃の鉢に紅解き入れ。是ぞと親と子が渡らぬ錦中絕ゆる。名殘は今ぞと夕波の泉水にさら〳〵〳〵。落瀧津瀨の紅葉と浮世の秋をせき下し。共に染めたる泡沫も紅くゝる遣水のツレ落ちて黃河の流れの末。地和藤内は岸頭に簑うち被き座をしめて。赤白二つの河水に心を付けて水の面。南無三寶紅が流るゝ。扨は望は叶はぬ。地味方もせぬ甘輝奴に母は預け置かれずと。踏み出す足の早瀨川。流れをとめて行く先の。濠を飛び越え塀を乘越え籬透垣踏破り。甘輝が城の奥の庭ツレ泉水にこそ着きにけれ。地先づ母は安穩嬉しやと飛上り。縛めの繩引きちぎり甘輝が前に立ちはだかり。(詞五常軍甘輝といふ鬼唐人は和主よな。天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは。おのれをおのれと奉つて味方に頼まん爲なるに。もつてうずれば方圖もない。味方にならぬは此の大將が不足なか。第一女房の緣といひ其方から從ふ筈。地サア日本無雙の和藤内が直付に頼む返答せいと。柄に手をかけ突立ちたり。詞ヲヽ女房の緣といへば猶ならぬ、御邊が日本無雙なれば我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る慮もなし。病死するまで便々とも待たれまい。追ツレ風次第にはや歸れ但置土產に首が置いて行きたいか。イヤサ日本の土產に汝が首を

と。地兩方拔かんとする所を錦祥女聲をかけ。ア、〳〵是なら〳〵病死を待つ迄もなし。詞只今流せし紅の水上を見給へと。地衣裳の胸を押開けば九寸五分の懐劍。乳の下より肝先迄横に縫うて刺通し。朱に染みたる其の有樣母は是はとばかりにて。かつぱと伏して正體なし。和藤内も動顛し。覺悟を極めし夫さへ不覺に驚くばかりなり。地錦祥女苦しげに。詞母上は日本の國の恥を思召し殺すまいとなさるれど。地我が命を惜みて親兄弟を貢がずば。唐土の國の恥とかうなる上は女に心引かさるゝ。人の誹はよもあるまじ。詞なう甘輝殿親兄弟の味方して。力ともなつてたべ父にも斯と告げてたべ。地もう物いはせて下さるな苦しいわいのとばかりにて消え〳〵。とこそなりにけれ。地甘輝涙を押隱しヲ、出來いた〳〵。自害を無にはさせまいと。和藤内が前に頭をさげ。詞某先祖明朝の臣下。進んで味方申すべき身の女の縁に迷ひしと。俗雖を憚りしに。我が妻只今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方大將軍と仰ぎ。諸侯王に準へ御名を改め。延平王國姓爺鄭成功と號し。地裝束召させ奉らんと武運開くる唐櫃の。二重の錦羅綾の袂緋の裝束。章甫の冠花紋の沓。珊瑚琥珀の石の帶莫耶の劍金を磨き。絹傘さつとさしかくれば。十萬餘騎の軍兵ども幢の旗幡の旗。吹拔き楯鉾弓鐵砲鎧の袖を列ねしは。會稽山の越王の再び出でたる如くなり。地母は大聲高笑ひ。ア、嬉しや本望やあれを見や錦祥女。地御身が命を捨てしゆゑ親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此の劍は九寸五分なれど四百餘州を治むる自害。此の上に母が存らへては始めの詞虛言となり。再び日本の國の恥を引起すと。娘の劍をおつ取つて咽にがはと突立つる。人々是はと立騷げばア、寄るまい〳〵とはつたと睨み。詞なう甘輝國性爺。母や娘の最期をも必ず歎くな悲しむな。地韃靼王は面々が母の敵妻の敵と。思へば討つに力あり。氣をたるませぬ母の慈悲此の遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし父は存らへ教訓せば。世に不足なき大將軍浮世の思出是迄と。肝の束を一抉り切りさばき。サア錦祥女此の世に心殘らぬか。何しに心殘らんといへども殘る夫婦の名殘。親子手を取り引寄せて國性爺が出立を見上げ。見下し嬉しげに。笑顏を逆婆の形見にて一度に息は絶えにけり。地鬼を欺く國性爺龍虎と勇む五常軍。涙に眼は眩めども母の遺言背くまじ。妻の心を破らじと國性爺は甘輝を恥ぢ。甘輝は又國性爺に愧ぢて萎るゝ顏かくす。亡骸をさむ道の邊に。地出陣の門出と生死二つを一道の。母が遺言釋迦に經。父が庭訓鬼に金棒討てば勝ち。攻むれば取る末代不思議の智仁の勇士。玉ある淵は岸破れず。龍栖む池は水涸れず斯る。勇者の出生す國國たり君君たる。日本の麒麟是な

るわと異國に。武德を照しけり。

第四

地唐土の便り今やと松浦潟。小睦が宿の明暮は唐の姫宮相住を。近傍隣家も浮名たて唐と日本の汐さかひ。ッシちくら者かと疑へり。地夫も今は國性爺と名を改め。數萬騎の大將軍と聞くからに。我も心の勇みあり。地若衆出立ちに態を變へ無付け髮の大たぶさ。翡翠の大髻ふつさりと禰宜の息子か脊藥賣か。女とよもや水淺黄の股引しめて。羽織着て。朱鞘木刀眞紅の下緒。花の口紅雪の白粉。菅笠深く脛高く。フシ足元輕き濱千鳥。フシ濱邊傳ひを。日參の。驗松浦の住吉や。フシ神前にこそ着きにけれ。地充滿其願と祈誓をかけ手を合はすると見えけるが。ひらりと拔いたる居合の早業。神木の松を相手取り。木刀翳し躍りあがつて聲をかけ。ゑい。やつたうゝゝゑいゑいたう。ゑいやつたう上段下段の太刀さばき。陽炎稻妻獅子奮迅。足とり手の内四寸八寸身の開き。踏込んで打つ入身の木刀。古木の松の片枝を。すつぱと切つて落せしは フシ今牛若ともいひつべし。地何時の間にかは栴檀女森の蔭より走出で。詞ナウナウ小睦殿。毎日々々時を違へず變つた風俗今日といふ今日跡を慕うて見付けしが。地誰に習うて此の兵法器用な事やと宣へば。詞いや師匠はなけれど夫の打太刀。習はうより慣れての事。地唐土の便り心許なく。お迎舟は參らずとも。お供して渡らんと此の明神へ吉凶を祈り候へば。詞是見給へ。木刀にて此の松の木の眞劍の如く切れたるは。神納受の驗と申し。商船の便船時節もよく候と。地申し上ぐればそれは嬉しし賴もしゝ。片時も早く戻してたべとスエテ御悅びは淺からず。詞御心安く思召せ。總じて此の住吉と申すは。船路を守護の御神にて神功皇后と申す帝。新羅退治の御時汐干珠汐滿珠を以て。御舟を守護し舟玉神とも申すなり。地昔唐土の白樂天といひし。人口本の智恵を計らんと。此の秋津洲に渡り給ひ。詞目前の景色を取敢ず。地青苔衣を帶びて巖の肩にかゝり。白雲帶に似て山の腰を廻ると。詠じ給へば大明神睦しき釣の翁と現じ。一首の歌の御答へ。スエテ苔衣。着たる巖はさもなくて。きぬ着ぬ山の帶をするかな。と詠じ給ひし御歌に。ぎつと詰つて樂天は。フシ爰より本土に歸るとかや。地國を守りの御神の。其の御歌は苔衣我が身に受けて旅衣。いさとて二人打連れて船路。遙けく三重へなりふりや。

栴檀女道行

唐子髷には。薩摩櫛島田髷には。唐櫛と。大和唐土打混ぜて。さしも慣はぬ旅立や。舟と陸とを行道は笠捨てられず。懷に。枕をたゝむ夢たゝむ。スエテ千里を胸にたゝみこみ。女心の強弓も。男故にぞ引かれ行く。我は故郷を出づる旅。君は故郷へ戻る旅ォクリ二葉にへ見せて栴檀女小睦が勇め力にて。地大明國へと思立つ フシオクリ心のへ内

こそ。遙かなれ ワシ親と夫とを。持ちし身は。何か歎きは有明のオクリ月さへ。同じ月なれど。なう二人見馴れし。ワシ閨の中。名残數々大村の。地浦の濱風一村雨はさら〳〵と晴れても晴れぬ我が涙。袖に包みて袂に拭ふ。鏡の宮に影とめて。スエテ泣かぬと人や見るめの浦。ワシ振りさけ見れば久かたの。日も行く末の空遠く。歸るさ何時ぞ天津雁誘へや誘へ。ワシ我が夫も二十五筋の琴の絲。結び契りし年の數。いざすががきて箱崎の。松とし聞かば。我も愈がん。磯邊傳ひに寄藻掻く。海士の子供の打群れて。彈き石投競又丁か半。三つ四つ五つ數へてはワシ幼な遊びも睦まじく。七瀬の淀に行く水も。昔の影や隱れんぼ。鬼の來ぬ間と諸ひしも濡れて乾かぬ旅衣。唐土舟を。松浦川。港もちかの浦風に。そなたのワシ方を見給へば。磯にたぐりの屑川波にゆらるゝ釣舟に。シテ地鬢づら結うたる童子一人。網はおろさで釣竿の。ワシい

と悠々と眠り來る。リキ詞なう〳〵お見。我は唐土へ渡る者。好からん方まで乘せてたべとぞ仰せける。シテあら何ともなや。一人は唐土人一人は筑紫人。女性の身にて唐土へ渡るとは戀しき人のあるやらん。地二千里の外故人の心。三五夜中にあらねども影を洩らさぬ月の舟。とく〳〵召され候へとはや差寄する水馴棹。二人不思議の緣と打乘りて。焦れ行くも白波に。ワシ風ぎて長閑けき海の面。ワキ地續きて見ゆる八十島を異國の人の家產に。スエテ教へてたばせ給へとよ。シテ地オ童子觸板に立上り海原遙かに指さして。如何に旅人聞き給へ。先づあれに續くは鬼界十二の島。五島七島中にもあの。白き鳥の。多く群れ居るは白石が島。此方に燻の立昇るは硫黃が島。扨又南に高く。霞かゝるは千どの島なり。あれは古へ天照神の。住吉の明神に笛吹かせ。舞樂を奏し二神の遊び給ひし所とて。二神島とは申すなりなう。ワシ唐土人とぞ語らるる。二人ワシ語る間に。數島のはや秋津洲の地を離れ。それより先の島々の。オワシ島かと見れば雲の峯。山か、と見れば空の海。風はなけれど蜑小舟。天の烏舟いは舟の。空走りゆく。如くにて。山なき西に山見ゆる月に。先だち日につれて日の本出でし秋風の。立ちもかはらず其の儘のスエテまだ秋風に鰹釣る ワシ松江の。港に着きけり。地人々舟より上り給ひ。誠にお見の御情坐したる樣なる舟の中。かゝる波濤を時の間に渡し給へる御方は。如何なる人にてあるやらん。シテ詞人がましやな名もなき者。我日の本に昔より住み馴れたれば住吉の。地大海童子と申す者。暇申して此の童は。シテ住吉に立歸り歸朝を。待ち申さんと。二人夕波の汀なる蜑のオクリ小舟を漕戻し。追風に任せつゝ沖の方に出でにけりやナホス沖の。方へぞ 三重

蒼立軍法（九仙山イ本）

サシ傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴ひ。會稽山に

籠り居て。種々の智略を廻らし。遂に呉王を滅して。勾踐の本意を。達すとかや。ク

セ 昔を問へば遥き世の。例も呉三桂が。今身の上に ツヨ 白雲の。山より山に。身を隠し。地 太子を育て奉る。移れば變る苔莚。宮前の楊柳寺前の花。長地 嶺の枯木に立ちかはるタの霧の間には我が身を以て褥とし。地 鸞輿鳳車の輦も ツヨ 蔦の。錦に織りかへて。朝の露のほとりには。スエテ谷の猿の肩に駕し。早二歳は昨日今日。暮るゝも山明くるも山。我が名も君が顔も。ホッ人目を包む雲水に。虹のかけ橋とだえして。深山鳥やぬえこ鳥。梢に來鳴く鸚鵡さへ。昔をまねぶ聲はなし。水遠くして ツヨ 山長く。根笹茅原槇檜原。峨々と聳えし槌鬼の山路に。疲れ行末は ツヨ 名にのみ聞きし。江化府の。九仙山に攀登り。アミノブシ 暫し。イむ。ツヨ 松風も。馴れてや。友と住馴れし。地 龐眉白髮の老翁二人石上に碁盤を据ゑ。黒白二つの石の數三百六十一目に、離たる馬目連々たる雁行。傍目もふらぬ碁の勝負。地 心は蜘蛛の。空に繋れる絲に似て。身は空蟬のツヨ 枯枝となり。浮世を離れし手談の技。中間禪の高臺かと太子を石壇に移し參らせ。枯木の株に願もたせ。見とるゝ我も諸共に。餘念の塵をや拂ふらん。地 呉三桂興に乘じ。詞 なう〜老人に物申さん。市中を離れし座隠の遊び面白しさり乍ら。琴詩酒の三つの友を離れ。碁を打つて勝負を爭ひ給ふこと別に樂む所ばし候か。シキ 翁さして答もなく。碁盤と見れば碁盤にて碁石と見

る目は碁石なり。地大地世界を以て。一面の碁盤となすといへる本文あり。謡心上の須彌山是にあり。大明一國の山河草木。今爰より見るに　ナホス　などか曇らん。地一角に九十目四方に四季の九十目。合せて三百六十目。一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ。シテ詞面白し〳〵。天地一體の樂みに二人對ふは何事ぞ。リキ詞陰陽二つあらざれば萬物調ふ事はなし。シテ勝負は扨如何に。ワキ詞人間の吉凶は時の運にあらずや。シテ扨白黑は。リキ夜叉。シテ相手段は如何に。リキ軍の法。シテ切つて押へて跳ねかけて。二人ツシ軍は花の亂れ碁や。　フシ飛交ふ鳥。群れ居る鷺と鷺へしも。白き黑きに夜叉も分かで昔の斧の柄も。自らとや朽ちぬべし。ワキ地翁重ねて曰く。詞今日本より國性爺と云ふ勇將渡つて。大明の味方となり只今軍眞最中。地是より其の間遙かなれども。一心の碁情眼力にありありと。合戰の有樣目前に見すべしと。宣ふ聲も山風もツシ碁石の。音にぞ驚きける。シテ地吳三桂はつと心付き。實に〳〵爰は九仙山。此の九仙山と申すは。四百餘州を目の下に嶺も微かに。おぼろ〳〵と雲かと見れば一霞。蔓に落つる春風の。フシ風のまに〳〵。吹霽らす。空は。彌生の半ばなる。平家柳櫻をこきまぜて。錦に包む。城廓の。あり〳〵とこそ。見えにけれ。何國の誰が籠りしぞ。門高く。淺深く。砦々に撥櫂築き。要害嶮岨を。帶びたりし。昇々たる。高楯。揚る雲雀や。歸る雁。花と見つゝも色々の。旗に翼や休むらん。長閑に照

らす朝日彫。月かげ打つて付けたるは日の本の美名を顯し。延平王國性爺が乘取つたる石頭城。いはねどそれと白眞弓鐵砲高麗。鉾鎚薙刀大旗小旗靡き合ひ。吹拔きのぼり馬印。翻翻と飜へり天も五色に染めなせば。藤も躑躅も山吹も共に映らふ。色見えて春の日數は盤上の。石の數とぞ積りける。二人若葉が末の深緑。晴行く雲の絶間より是南京の雲門關と。名乘つて出づる杜鵑。幔幕高き。卯の花垣今年も夏の半ばなり。方三十里に逆茂木引き。關の大將左龍虎右龍虎三千餘騎。兜の星を輝かし。太鼓を打つて亂擊し。鳥の空音は。は。か。二人るとも。ゆるす方なき勢に。劍は夏野の薄を亂し。火繩は澤の螢火と。要害嚴しき關の戸は鳥も。通はぬばかりなり。日本育ちの國性爺。譬へば此の關鐵石にて堅めたりとも。押破つて通らん事。童が障子一重破るよりも易けれども。軍中の目覺ましに。我本國文治の昔。武藏坊辨慶が。安宅の關守欺きし。例を引くや梓弓。軍兵に目配せし。抑是は駒山の篭楊貴妃の御廟所。大眞殿再興勸進の大行者。勸進帳を聽聞し勸めに入れや關守と。軍勢の着到一卷取出し。味方の祈禱敵調伏と觀念し。高らかにこそ讀上げけれ。それ。つら〳〵おもんみれば。韃靼逆徒の秋の月は。無慚の雲に隱れ。生死不定の永き夢。鬱かすべき勢もなし。爰に往昔。帝在します御名をば。玄宗皇帝と名付け。奉り寵愛の。玉妃に別れ。戀慕やみ難く。涕泣眼に荒く涙玉をつらく思ひを。善路に飜して大眞殿を建立す。斯程の鑒場の。絶えなんことを悲みて。臨邛の方士が未葉諸國を勸進す一戰合戰の聖は。敵方にては首を矛に貫かれ味方にては。合戰勝利の勝鬨揚げん歸命稽首敬つて申すと讀上げたり。關の大將右龍虎左龍虎は國性爺。飛んで火に入る夏の蟲。梢に蟬の喚いて蒐れば。莞爾と笑ひ。樊噲流は珍しからず。門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて。貫の木逆茂木押破り。向ふ者を敲き伏せ逃ぐるを掴んで人礫。左龍虎右龍虎討取つて雛なく過ぐる月日の關や。碁盤の上も。二人關吹越ゆる。秋の風霧霽れ渡る山城は。韃靼の軍將海利王が立籠り。前は巖壁後は海。要害頼みの油斷を見て。秋の夜討の國性爺乘つたる駒の轡虫。月まつ虫の。聲澄渡り。しん〳〵りん〳〵しづ〳〵〳〵と。濠際近く攻寄せて。百千の高提灯一度にはつと立てたるは。千世界の千日月一度に見るが如くにて。城の兵寂耳に水の。あわて騒いで甲を脇當鎧は逆樣。馬を背中にヲ。〳〵〳〵〳〵〳〵大手の門を押開き。切つて出づれば寄手の勢貝鉦鳴らし鬨の聲。大將圖屬押取つてひらり。ひらりひら〳〵。三重ひらり閃かし。日本流の軍の下知。攻付け拉ぐは義經流。緩

めて討つは楠流。二人俱利伽羅落し坂落し屋島の浦の浦波も。爰に寄手の勢強く揉立て〳〵。三重切立てられ城中さしてぞ引いたりける。時分はよしと夕暗に コハリ日本祕密のほうろく火矢。擊つて放つ其の響須彌も崩るゝばかりなり。楯も櫓も海士の焚く。潮の煙か炭竈か火焔は秋の村紅葉。楚人の一炬に焦土となんぬ。咸陽宮ともいひつべし。國性爺勝閧の駒の手綱を搔繰つて。輪乘をかけてくる〳〵〳〵くるり。〳〵と乘り廻し巡る月日に ナホス僞りのなき世。なりけり神無月。時雨て過ぐる。岡の邊に棟門高き コハリ城廓こそ。是も國性爺が切取りし福州の長樂城。軒の甍は爛爛。爛と玉を色どる初霰。雲交りの夕嵐。吹きくる上に降積り。塀も櫓も埋れて ナホス雪の眺めは。フシ面白や。地其の外閩州建州諸國の府。三十八所切取つて。太子の御幸を待顏に所所に附城築き。兵糧軍兵込め置いて。威勢は天の氣に顯れ手に取る。フシ

様にぞ見えにける。シテ地呉三桂悅喜の餘り身をも人をも打忘れ。太子を抱き奉り フシ城ある山へと走り行く。ワキ地二人の老爺引止め愚かなり〳〵。詞目擊一瞬に見ゆると雖も。各百里を隔てたり。汝此の山に入つて一時と思ふとも五年の春秋を送り。四年に四季の合戰を見たるとはよも知らじ。地斯いふ中にも立つ月日太子の成長汝が身の。面影をよく水鏡。水清ければ影清し汝忠あり誠あり。心の鏡に映り來る我は先祖高皇帝。我は青田劉伯溫。二人住家は月の中に立つ桂の裏葉吹返し。シテ地智見の目には上十五。ワキ地下十五夜と見つれども。シテ地衆生は心亂れ碁の。フシ石とやさぞな見るらん。ワキ謠又水中の遊魚は。シテ地フシ釣針と髮へりワキ地雲上の飛鳥は。シテ地弓の影とも驚けり。ワキ謠一輪も下らず。シテ地萬水とても上らねば。二人コハリ盈ちては虧くる影あれば。虧けても盈つる月を見よ。暫しが程の雲隱れ遂には晴れて天照らす。日の本和國の神力にて太子の位は早出づる日と。宣ふ御聲は松吹く嵐。佛ばかりは松立つ山の峯の嵐に吹き。ナホス隱れてぞフシ失せ給ふ。シテ地茫然として呉三桂。夢かと思へばまどろまず。實にも五年の月日を經たる證しにや。我が顏には髭伸びたり。太子の尊容時の間に御脊丈も立伸びて。早七歳の。御物ごし。呉三桂。〳〵と召さるゝ御聲おとなしく。雪の御山に鶯の初音を聞きし思ひでにあい。〳〵あいと頭を下げ。天を拜し地を拜し。嬉しさ足も定まらず フシ二度夢の心地せり。地御前に手を束ね。詞古への鄭芝龍が一子國性爺。日本より渡つて味方の義兵を起すとは。音にこそ承れ。春秋五年の軍功明かに。大明半國は取り返し候へば。地國性爺に案内して。君是にまします旨を告知らせたく候と。申しも敢へぬに遙かの谷の向ふより。詞なう〳〵それなるは。司馬將軍呉三桂にてはなきか。呉三桂〳〵と呼ばはる方をよく〳〵見て。御

身に昔の鄭芝龍か。是は是は吳三桂。命あれば珍しや。「子國性爺が故郷の妻。柄檀皇女を御供せしと。地招きあへば姫宮も。懐しの吳三桂。おことが妻の柳歌君命かけての忠節にて。浮世を渡る浮かれ船日本へ吹流され。一官親子夫婦の情不思議に二度逢ふ事よ。柳歌君は何國にぞ嬰兒は何となりにけるぞ。早う逢ひたい逢はせてたべとスエテ焦れ給ふぞ道理なる。詞されば其の時の深手にて。我が妻は空しくなり。后も敵の鐵砲に命を落し給ひしゆゑ。胎内を斷破り。我が子を害し敵を欺き。太子は山中にて。地安々育て フシ參らせし。地早七歳の生ひさきは是に渡らせ給ふぞと。語るに付けて姫宮も。わつとばかりにどうと伏し人目も。わかぬ御歎き フシ思ひ。やられて悼はしゝ。地一官籠を見返つて。詞あれ〳〵梅勅王奴が姫宮を見付け。數千騎にて追つかくゐ年寄骨に力身を出し踏留つて命限り。防ぎ支へんと逸れども。宮の御うへ危なし生ひさきは是に渡らせ給ふぞと。語るに付けて姫宮も。わつとばかりにどうと伏し人目も。わかぬ御歎き フシ思ひ。やられて悼はしゝ。地一官籠を見返つて。詞あれ〳〵梅勅王奴が姫宮を見付け。數千騎にて追つかくゐ年寄骨に力身を出し踏留つて命限り。防ぎ支へんと逸れども。宮の御うへ危なし

ノ〳〵。それへどうぞ退けたいが此の山不案内谷を越す道はあるまいか。いや〳〵此の山めぐれば六十里。谷深う て底知れず。是へも呼ばれず其處へも越されず。ヱヽ如何せん何とかせんと虛空を拜し。地只今奇瑞を現じ給ふ。御先祖高祖高帝。青田の劉伯溫。神仙微妙の力を合せ。非常の危難を救ひ給へと。太子諸共一心不亂に祈誓あり。姫宮小睦も手を合せ南無。日本住吉大明神。禍壽海無量と丹精無二の心ざし。天も感應地も納受。洞口より一筋の雲無心にして鏡けば。天のかけ橋鵲の渡せる橋や。葛城の久米の岩橋夜ならで フシ夢路を辿る。如くにて渡るともなく行くともなく オクリ向ふへ峯に上り着き。 フシ足もわぢ〳〵飯ひけり。地程なく賊兵雲霞の如くどつと馳寄せ。詞あれ〳〵太子吳三桂も見えたるは。思ひも寄らぬ拾ひもの。地網で鯨を取るとは此の事。的になりたる奴原。やれ弓よ鐵砲よ フシ打取れ射取れと犇きける。詞梅勅王下知をなしやれ待て〳〵。後は廣し退き場はあり。弓鐵砲は叶ふまじ。こりや見よ終に見ぬ雲梯。必定國性爺奴が日本流の算盤橋。惡橋なんどといふ物ならん。敵に食物あてがふは愚かの軍法。地續けや者ども渡れや渡れと五百餘騎。押合ひ詰合ひ我先にと。ゑい〳〵聲をかけ橋の半ば渡ると見えけるが。山風谷風颯々〳〵と雲のかけ橋吹切つて。大將始め五百餘騎。どた〳〵どたと落ち重なり面額打割り頭を碎く。泣いつ喚いつ彌が上 フシ谷をも埋むるばかりなり。詞吳三桂鄭芝龍。得たりかしこし心地よしと。地大石大木當るを幸ひ。投げかけ〳〵打ちつくれば。一騎も殘らず刹那が中人の鮨とぞなりたりける。詞中にも大將梅勅王。岩根を傳ひ葛をたぐり這登れば。吳三桂遊仙の碁盤提げこりや。此の碁盤は葛藤で練つて石より堅く。若うて口に合はずとも一口喰ふか。おのれが一目めをもつて御無月の碁の相手。地碁勢を見よと頭を出

せば丁と打ち。面を出せばばたと打ち。ぶち付け〳〵腦も鉢も打碎かれッシ微塵になつてぞ失せにける。ヲヽ〳〵本望々々。本朝にもかゝる例は。先例吉野の碁盤忠信。天は榧の木是は葛藤の九仙山。ツメ先手が味方へ廻りくる四つ目殺しに中手を入れで。翅鳥に懸けて打斷つて。攻手搦手鬨切つて。手詰のせきを勝軍敵のはまを拾ひ上げ。國も御代も打ちかへで手を盡くしたる劫もあり。忠義の道はまつ斯う〳〵。道は斯うよと打連れて福州の。城にぞ入りにける。

第五

地 泰山を挾んで北海をこゆる事は能はず。王の王たらざるは能はざるにはあらずとかや。延平王國性爺兵を用ふること掌にまはすが如く。五十餘城を屠り武威日々に熾んにして。妻の女房故鄉より楊檀皇女を供し參らせ。九仙山より吳三桂太子を御幸なし申せば。十善天子の印綬を捧げ。永曆皇帝と號し奉り。龍馬が原に八町四方の木城をからくみ。陣幕外幕鄙の幕。陣屋の上には日本伊勢兩宮の御祓。大幣を勸請し。太子を別殿に移し參らせ。其の身は中央の床几にかゝり。司馬將軍吳三桂散騎將軍甘輝同じく左右の床几に坐し。韃靼大明分目の勝負軍。フシ評定取々なり。詞吳三桂團扇取直し。凡そ謀は淺きに出でて。深きに至るに如くはなしと竹筒一本取出し。此の筒に蜜をこめて山蜂多く入れ置きたり。斯の如く數千本拵へ先手の雜兵に持たせ。立合の軍する體にて筒を捨てて逃退かば。貪慾熾んの韃靼勢。食物と心得拾ひ取らんは必定。口を抜くと齊しく數萬の山蜂群り出で。賊兵を毒痛せしめ。漂ぶ所を取つて返し八方より討取るべし。地是御覽候へと口を抜けば數多の蜂フシ鳴り羽ぶいてぞ出でにける。詞賊兵あざ笑ひ。淺はかなる童威の謀計。地捨てて恥かゝせよと積重ねて火を付けん。其の時筒の底に仕掛けたる。放火の藥鳴渡り飛散つて。十町四方の軍兵に生殘る者は候まじと。火繩を筒に差付くると齊しく飛んだる亂火の仕懸け實にも。フシかうとぞ見えにける。詞五常軍甘輝果物入れたる花折一合取出し。フシ吳三桂の奇計尤候。又某が謀。斯の如く折籠二三千合も拵へ。樣々の菓子餉酒肴認め。各是に鴆毒を入れ陣屋に貯へ並べ置き。陣所近く敵を引受け。戰負けたる體にして十里許り引取るべし。韃靼が例の長追ひ。勝誇つて陣屋に込入り此の食物に眼くれ。寶の山に入りたりと軍將雜兵。我先にと掴み喰はんは必定。唇に觸ると齊しく片端に毒血吐き双に血ぬらずして。咽しにしてくれんと。面々軍慮心を碎き評議とりぐ區々なり。國性爺打領きフシ。詞何れも一理ある計略。批判申すに及ばずさりながら。國性爺が魂に徹し忘れ難きは。母が最後の一句の詞。韃靼王は汝等が母の敵。妻の敵と思込んで本望遂げよ。氣を撓ませぬ其の爲の自害なり

との詞の末。骨に浸み五臓に徹し刹那も忘るゝ事はなし。地千變萬化の謀も何かせん。只無二無三に攻入つて韃靼王李蹈天に。押並べてむずと組み。ずた〳〵に刻んで棄てずんば。假令國性爺が百千萬の軍功も。君の忠も世の仁義も母の爲には不孝の罪と。鏡の樣なる兩眼に涙をヌエはら〳〵と。流しければ哭三桂甘輝を始め。一座の上下諸共にフシ皆々。袖をぞ濡しける。地殊更女の身乍らも。故郷を忘ぜず生國を重んじ。最期迄日本の國の恥を思はれし。我も同じく日本の產生國は捨てまじと。あれ見給へ天照大神を勸請す。詞某四夫より出でて數ケ所の城を攻落し。今諸候王となつて各の傳きに預る事。全く日本の神力によつてなり。然れば竹林にて隨へし島夷ども。日本頭に作り置く。彼等を眞先に立て日本の加勢と披露せば。元より日本弓矢に長じ武道鍛錬隱れなく。韃靼夷聞怖して二の足になる所を蹙みよせて乘取らんと。此の頃我が女房に牒合せたり。ヤア〳〵源の牛若。地軍兵率し是へ〳〵と團扇を上ぐれば。あつと答へて立出づる小睦が髪の初元結。諸軍勢の元服頭。大和淺黄に唐錦フシ花やかなりける出立なり。假御殿の幔幕より姫宮走り出で給ひ。詞なう〳〵國性爺。此の族は御身の父一官の族印。地此の書付も一官の筆心元なき文言と。出し給へば床几を下てヌエテ讀み上ぐる。我愁ひに明朝先帝の朝恩を報ぜんと。再び此の土に歸參し功もなくフシ譽もなし。老後の餘命幾許のコハリ樂をか期せん。今月今夜。南京の城に向つて討死を遂げ。美名を和漢に留むる者なり。ナホス鄭芝龍老一官。行年七十三歳と。讀みも終らず國性爺すつくと立ち。詞サア敵に念が入つて來た。地母の敵に父の敵。智略も入らず軍法も何かせん。方々は兎も角も身に迫るは國性爺。只一人南京の城に乘込み韃靼王李蹈天が首捻切り。父が最期の場を換へず。討死して父母が。冥途の旅を同道せん今生のお暇乞と。飛んで出づれば。詞兩大將袖に縋つてアア曲もなし。甘輝が爲には妻の敵舅の敵。吳三桂が爲にも妻の敵兄の敵。ヲ、それ〳〵何れも敵に輕めなし。天下の敵は三人一所。地サアこいと駈出づる。此の三人の太刀先には。如何なる天魔厄神も面を。向くべき三重〳〵方もなし地鄭芝龍老一官。夕霧暗き黑革縅すすどけに出立ちて。南京城の外廓の大木戸敵いて。國性爺が父老一官と申す者。詞年寄膝骨弱つて人並の軍叶はず。さればとて若殿原の軍咄。安閑と聞いてもゐられず此の城内に推參して。速かに討死し素意を達したく候。地あはれ李蹈天出合ひ此の白髮首を取つてたべ。生前の情フシならんとぞ呼ばはりける。地城の中より六尺豐の大男優しゝ一官相手になつて取らせんと。木戸押開き切つてかゝる。心得たりと二打三打打つぞと見えしが。つゝと入つて首打落ゝ大きに不興し大音上げ。詞一官年寄つた

れども斯樣の端武者に遊る首持たず。李蹈天出合はせよ外の者が出でたらば。何時まで也此の通りと城を脫んで立つたりけり。韃靼大王壽陽門の櫓に顯れ出で。國性爺が爺老一官とは彼めよな。問ふべき仔細數多あり殺さずとも搦取つて引いて來れ。地承ると四五十人棒ずくめに取廻し。陳をあらせずめつた打ち捻伏せ〳〵縛り付け。城中さして引いて入る。ワシ無念といふも餘りあり。地程なく甘輝吳三桂國性爺を眞先に。大手の門に駈付くれば引續いて六萬騎。小睦を後陣の大將にて今日を死戰と押寄せたり。國性爺下知をなし。詞未だ生死も知れず殊に此の南京城。四方に十二の大門三十六の小門あり。一方にても明いたる方より落失せんは必定。地四方に心を配つて討てと合詞に手を配り。簸を叩き鬨の聲ワシ天も傾く許りなり。地小睦が嗜む劍術の。牛若流の小太刀を以て一陣に進出で。相手選ばず時選ばず。所も選ばぬ此の若武者死にたい者で相手ぞと。思ふ樣に廣言し。重戰ひける。地賊兵數多討たるれども。七十萬騎立籠つたる南京城。ワシ落つべき樣こそなかりけれ。地國性爺は如何にもして。父の生死を知るべしと駈廻つても詮方なく。陣頭に大音上げ。詞我唐土へ渡つて五年の間。數ケ度の合戰終に無刀の軍をせず。今日珍しく劍の柄に手もかけまじ。馬上の達者劍術得物の韃靼勢。寄つて討てやと招きかくれば。地憎い廣言打殺せと。我も〳〵と喚いて懸る。引寄せて劍捻取り叩き拉ぎ打ちみしやぎ。鉾鎚長刀もぎ取り〳〵。捻曲げ押曲折碎き。寄くる奴原臑に障れば蹈殺し。手に觸るを捻殺し。絞殺しては人礫。騎馬の武者は馬共に一つに摑んで手玉に上げ。四足を摑んで馬礫。人礫馬礫石の礫も打雜り。人間業とは三重見えざりし。地さしもの韃靼攻寄せられ。すは落城と見えたる所に。一官を楯の表に縛り付け。韃靼王を外に工て於谷天進出で。詞ヤア〳〵國性爺。汝日本の小國より這出で。唐土の地を蹈荒し數ケ所の城を切取り。狽へ大王の御座近く。今日の狼藉緩怠千萬。是によつて親一官を斯の如く召捕つたり。日本流に腹切るか但親子諸共。地直に日本に歸るに於ては一官を助くべし。承引なくばたつた今。目の前にて一官を引張切りせん。兎角の返答はや申せと高聲に呼ばはれば。今迄勇む國性爺。ッテはつとばかりに目も眩み力も落ちて打萎れ。地諸軍勢も氣を失ひ。ワシ陣中。ひつそと靜まりける。詞一官齒噛みをなしヤイ國性爺。狼狽たか後れたか。七十に餘る此の一官命存らへて何になる。母が最期の詞健氣なりとて。父にも語り吹聽せしを忘れしか。是程迄仕畢せし一大事。此の被爺が命一つに迷うて仕損ぜしといはれて。地末代の恥辱故郷の聞え。日本生れは愛に溺れ義を知らぬと。他國に惡名止めんは日本の恥ならずや。詞女

なれども汝が母は生れ故郷を重んじ。日本の恥と云ふ字に命を捨てしを忘れしか。是程の手詰になり。此の親が目前に八つ裂にせらるゝとも。目もふらず飛びかゝつて本望遂げ。大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失うた。エ、未練なりあさましとズエテ地蹈鞴踏んで制すれば。地國性爺父に恥しめられ思ひ切つて。大王目懸け飛んで出づれば李蹈天。父に劍を差當る。はつと氣も消え立留まり進み兼たるしどろ足。頭の上に須彌山が今崩れかかつても。びつくともせぬ國性爺ッシ前後にくれてぞ見えにける。詞甘輝吳三桂互にきつと目配せ。つゝと出で韃靼王の前に頭を下げ。斯まで仕擧せ候へども御運強き韃靼王。一官搦め取らるゝ事國性爺が運も是迄。未賴みなき大將我々兩人が命を助け給はらば。國性爺が首取つて差上げん。御誓言にて御返答承らんと。地いひも敢ぬに韃靼王。ヲ、〳〵神妙々々といふ所を飛びかゝつてはつたと蹴倒し絞上ぐれば。隙をあらせず國性爺。飛びかゝつて父が縛め捻切り捻切り。李蹈天を取つて抑へ父を縛りし楯の面。まつ其の如く高手小手に縛りつけ。三人目と目を見合せて。ア、嬉しやと喜ぶ聲ッシ國中響くばかりなり。地諸軍勢勇みをなし太子姫宮御幸なし奉れば。御前にて彼奴原則ち罪科に行ふべし。詞夷國とはいひながら韃靼國の王なれば縛りながら笞打ちして。本國へ送るべしと。地左右に分つて五百鞭。半死半生ッシ打ちすゑて引退けたり。地サア是からが李蹈天元の起りの八逆五逆十惡大片身恨みのない樣に。國性爺は首引拔かん。兩人は兩腕と三方に立ちかゝり。聲をかけて一時にゑいや。うんと引拔き捨て。永曆皇帝御代萬歲。國安全と壽くも大日本の君が代の。神德武德聖德の。滿ちて盡きせぬ國繁昌民繁昌の惠みによつて。五穀豐饒に打續き萬々。年とぞ祝ひける。

右此本者以太夫直傳寫之頌句音節墨譜等不殘毫厘令校合候畢尤加祕密全令開版者也

竹本筑後掾

大阪 北久寶寺町 御堂筋 正本屋 仁兵衛 開